

岐志花掛山古墳

— 県道福岡志摩前原線道路改良事業に係る発掘調査報告書 —

糸島市文化財調査報告書

第 23 集

2 0 2 0

糸島市教育委員会



岐志花掛山古墳 空中写真1
(北東から引津湾を望む)



岐志花掛山古墳 空中写真2
(北から可也山方面を望む)



岐志花掛山古墳 空中写真3
(南東から芥屋方面を望む)



岐志花掛山古墳 空中写真4
(石室掘削前 (南から))



岐志花掛山古墳 空中写真5
(石室完掘および墳丘盛土除去後 (西から))



岐志花掛山古墳 石室内遺物出土状況 1
(東から)



岐志花掛山古墳 石室内遺物出土状況2（左側玄門部周辺）



岐志花掛山古墳 石室内遺物出土状況3（右側玄門部周辺）



岐志花掛山古墳 石室内遺物出土状況および出土遺物
（左：耳環出土状況、中：耳環、右：ガラス小玉）

序

ここに県道福岡志摩前原線道路改良事業に先立ち発掘調査を実施した岐志花掛山古墳の調査報告書を刊行します。

本書に掲載されている岐志花掛山古墳は糸島市の北西部に位置します。花掛山は近年、冬の名物である牡蠣小屋に訪れる観光客で大きな賑わいをみせる岐志漁港のすぐ裏山で、道路改良事業に先立つ試掘調査により、この山頂から新たな古墳が発見されました。地名と山の名称を組み合わせ岐志花掛山古墳と命名しております。本書にはこの古墳の発掘調査成果を掲載しています。

本市がある糸島地域は、大陸・朝鮮半島に近いこともあり、古くから交流の窓口として栄えてきました。それを裏付けるように、市内には数多くの遺跡が分布しており、旧石器時代から現在に至るまでの当地の歴史や人々の暮らしのようすをうかがい知ることができます。

この地にあって、海を臨む丘の上に作られた本古墳はまさに交流や交易に携わった人物が埋葬されたことを想像させるのに十分です。

本書が、当古墳の内容を将来にわたって伝えていく資料としてだけでなく、周辺地域はもとより北部九州全体の歴史を紐解く上での鍵となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました福岡県福岡県土整備事務所様、周辺住民の皆様、科学分析にご協力を頂きました福岡市埋蔵文化財センター様、空中写真を撮影いただきました有限会社空中写真企画様、金属器の保存処理にご協力を頂きました株式会社吉田生物研究所様、そして、猛暑をいとわず調査に参加された発掘調査作業員の皆様に心から感謝を申し上げます。

令和2年3月19日

糸島市教育委員会
教育長 家宇治 正幸

例 言

1. 本書は糸島市志摩岐志の花掛山にて、福岡県道54号福岡志摩前原線道路改良工事に伴い実施した文化財調査の報告書である。
2. 発掘調査および報告書作成等は福岡県福岡県土整備事務所からの委託事業である。
3. 現場における遺構実測と地形測量、発掘調査作業は、生田弘毅、浦上良枝、黒柳政信、仲西和豊、濱田涼子、堀正三、松隈耕二、宮崎哲雄、吉原明美、谷口正英、田尻裕泰、井上まり子、中田風歌、齋藤千絵、秋田雄也、江野道和が行った。
4. 「Ⅲ. 科学分析」については福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏から玉稿をいただいた。
5. 古墳から出土した金属器のX線写真撮影と玉類等の分析については、福岡市埋蔵文化財センターの比佐氏、松園菜穂氏にご協力をいただいた。
6. 現場における写真および出土遺物の撮影は中田、齋藤、秋田、江野が行った。
7. 現場における空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
8. 古墳から出土した金属器の保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託した。
9. 本書に掲載した全体図等の座標は世界測地系（測地成果2000、2011）を用いている。
10. 遺物の復元、実測、製図は主に、山崎嵩雄、田尻裕泰、稲富聡、稲富良子、春口将輝、山口直哉、江野が行った。
11. 本書の挿図中の遺物番号は写真図版の番号と統一している。
12. 横穴式石室の名称は奥壁を向いて左右側壁としている。
13. 本書の編集は江野が行った。



本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査の工程	1
4. 位置と環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	4
II. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と出土遺物	5
(1) 墳丘と外部施設	5
(2) 地山整形と墳丘盛土層	5
(3) 石室	7
(4) 墳丘出土遺物	25
3. 小結	34
(1) 古墳の時期と規模	34
(2) 須恵器のヘラ記号	34
III. 科学分析	
1. 糸島市岐志花掛山古墳出土装身具の保存科学的調査（比佐）	35

挿図目次

第1図 岐志花掛山古墳の位置と周辺の主な古墳・遺跡図(1/50000)	2
第2図 岐志花掛山古墳の位置と周辺の地形図(1/2500)	6
第3図 岐志花掛山古墳 調査区地形測量図(1/500)	8
第4図 岐志花掛山古墳 墳丘遺存状況測量図(1/200)	9
第5図 岐志花掛山古墳 外護列石実測図(1/40)	10
第6図 岐志花掛山古墳 墳丘地山整形状況測量図(1/200)	11
第7図 岐志花掛山古墳 墳丘土層断面実測図(1/80)	12
第8図 岐志花掛山古墳 石室上面および羨道部閉塞状況実測図(1/40)	13
第9図 岐志花掛山古墳 石室実測図(1/40)	14
第10図 岐志花掛山古墳 石室敷石実測図(1/40)	15
第11図 岐志花掛山古墳 石室遺物出土状況実測図(1/20)	16
第12図 岐志花掛山古墳 石室出土装身具実測図(1/1・2/3)	17
第13図 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器実測図1(1/2)	18
第14図 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器実測図2(1/2)	19
第15図 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器実測図3(1/2)	20

第16図	岐志花掛山古墳	石室出土土器実測図 1 (1/3)	21
第17図	岐志花掛山古墳	石室出土土器実測図 2 (1/3)	22
第18図	岐志花掛山古墳	石室出土土器実測図 3 (1/3)	23
第19図	岐志花掛山古墳	墳丘土器出土状況実測図 1 (1/10)	24
第20図	岐志花掛山古墳	墳丘土器出土状況実測図 2 (1/10)	26
第21図	岐志花掛山古墳	墳丘土器出土状況実測図 3 (1/10)	27
第22図	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器実測図 1 (1/3)	28
第23図	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器実測図 2 (1/3)	29
第24図	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器実測図 3 (1/3)	30
第25図	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器実測図 4 (1/3)	31
第26図	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器実測図 5 (1/3・1/4)	32
第27図	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器実測図 6 (1/2・1/3)	33
第28図	岐志花掛山古墳	墳丘推定復元図(1/200)	34

図版目次

巻頭図版 1	岐志花掛山古墳	空中写真 1
	岐志花掛山古墳	空中写真 2
巻頭図版 2	岐志花掛山古墳	空中写真 3
	岐志花掛山古墳	空中写真 4
巻頭図版 3	岐志花掛山古墳	空中写真 5
	岐志花掛山古墳	石室内遺物出土状況 1
巻頭図版 4	岐志花掛山古墳	石室内遺物出土状況 2
	岐志花掛山古墳	石室内遺物出土状況 3
	岐志花掛山古墳	石室内遺物出土状況および出土遺物
図版 1 - 1	岐志花掛山古墳	空中写真 6
図版 1 - 2	岐志花掛山古墳	石室上面検出状況
図版 2 - 1	岐志花掛山古墳	石室検出状況 1
図版 2 - 2	岐志花掛山古墳	石室検出状況 2
図版 2 - 3	岐志花掛山古墳	石室検出状況 3
図版 3 - 1	岐志花掛山古墳	石室床面遺物出土状況 1
図版 3 - 2	岐志花掛山古墳	石室床面遺物出土状況 2
図版 3 - 3	岐志花掛山古墳	石室床面遺物出土状況 3
図版 4 - 1	岐志花掛山古墳	墳丘遺物出土状況 1
図版 4 - 2	岐志花掛山古墳	墳丘遺物出土状況 2
図版 4 - 3	岐志花掛山古墳	墳丘遺物出土状況 3
図版 4 - 4	岐志花掛山古墳	墳丘遺物出土状況および外護列石、土層断面検出状況
図版 4 - 5	岐志花掛山古墳	土層断面検出状況
図版 5 - 1	岐志花掛山古墳	石室出土鉄器 1
図版 6 - 1	岐志花掛山古墳	石室出土鉄器 2
図版 7 - 1	岐志花掛山古墳	石室出土鉄器 X 線写真
図版 8 - 1	岐志花掛山古墳	石室出土土器 1
図版 9 - 1	岐志花掛山古墳	石室出土土器 2
図版 10 - 1	岐志花掛山古墳	石室出土土器 3
図版 11 - 1	岐志花掛山古墳	石室出土土器 4
図版 12 - 1	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器 1
図版 13 - 1	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器 2
図版 14 - 1	岐志花掛山古墳	墳丘出土土器 3 および出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本書で報告する岐志花掛山古墳は、県道福岡志摩前原線の道路改良工事に伴い実施されたものである。福岡志摩前原線は糸島半島の海近くを巡る主要地方道であり、前原側から芥屋方面に向かって順次、道路改良工事が行われてきた。従来の道路は集落内を通過しているため、狭く、見通しの悪い危険な箇所もあったが、改良工事によって、交通の安全確保や渋滞緩和等が図られると考えられている。今回、発掘調査を行った地点は花掛山を掘削し、道路を通過させる部分であり、山頂から裾にかけて地形が大きく改変される計画であった。

工事計画については平成29年7月26日に福岡県福岡県土整備事務所から通知があり、これを受けて、同年9月27・28日の2日間にわたって試掘調査を実施した。該当地点は山頂部までが急斜面となっており、重機等の搬入が困難であったことから人力による掘削作業を選択した。山頂からは北西、北東、南東の3方向に尾根が伸びており、それぞれの尾根線上に遺構が存在する可能性があるため、合計8箇所のトレンチを設置した。試掘の結果、山頂付近から古墳の横穴式石室の基底石と考えられる石組の上面が検出された。この古墳については『志摩町遺跡等分布地図』（志摩町教育委員会、1995年）に記載がなく、名称が無かったため、大字名である岐志と山の名称を組み合わせ岐志花掛山古墳と呼ぶこととした。

岐志花掛山古墳の本調査については調査体制を整え、翌年度実施することとした。

2. 調査の組織

平成30年度実施の発掘調査および翌令和元年度実施の報告書作成に係る組織は以下の通りである。

調査主体者 糸島市教育委員会

総括 教 育 長 家宇治正幸

教育部長 泊 早苗（平成30年度・発掘調査時）

井上義浩（令和元年度・報告書作成時）

文化課長 岡部裕俊

文化課長補佐兼文化財係長 村上 敦

調査 同 文化財係 主事 秋田雄也

主幹 江野道和

3. 調査の工程

本調査は平成30年5月9日に開始し、同年10月12日まで実施した。調査の終盤に近い9月2



第1図 岐志花掛山古墳の位置と周辺の主な古墳・遺跡図 (1/50000)

日10時から12時にかけて、調査成果を一般に公開する現地説明会を開催した。志摩岐志・志摩新町など周辺にお住まいの皆さまに加え、県内市外、佐賀県など県外からも見学者が訪れ、人数は100名を超えた。

調査終了後、出土遺物については、引津公民館・前原公民館・二丈中学校等で行った出前講座において教材として活用した。加えて、令和元年7月17日～9月16日に伊都国歴史博物館で開催された夏季企画展「伊都国発掘『令和元年』～最新発掘情報と平成の発掘総まくり～」にて展示し、広く公開した。

古墳から出土した金属器の保存処理と遺物の整理作業、報告書作成作業については翌年度、令和元年度に実施した。

4. 位置と環境

(1) 地理的環境

本報告書に掲載した岐志花掛山古墳は、糸島市の北西部、志摩半島に位置する標高40.3mの花掛山山頂にある。古墳の位置する志摩半島には、可也山、火山、天ヶ岳、立石山などの山体と、その周囲に標高40～100mほどの丘陵が広がっており、志摩山地・丘陵を構成している。この間に小河川による開析平野が樹枝状に入り込んで、志摩平野を形成しており、海岸には砂丘が発達した志摩半島西部平野や志摩海岸平野が位置する。岐志花掛山古墳西側は志摩半島西部平野にあたる。

岐志花掛山古墳からの眺望は良好で南西側眼下には岐志漁港と引津湾が広がり、その遠方には唐津湾と高島、さらにその奥には東松浦半島の上場台地が横たわるのがみえる。また、北側には玄界灘が望め、天気の良い日は海上約30km離れた小呂島までみることができる。

花掛山の麓には田畑が広がる狭長な低地が広がっており、この西寄りには岐志新開川が流れている。古墳時代にはこの低地は海であったと考えられ、新開、津脇、中新田、下新田、渡瀬など干拓地や海のそばであったことをうかがわせる字名が残っている。以上のことから本古墳は海と関係の深い立地にあるといえる。

1. 岐志花掛山古墳 2. 古野古墳群 3. 岩野古墳群 4. 山崎古墳 5. 新町支石墓群 6. 御床松原遺跡 7. 北口古墳群 8. 堀切古墳 9. 鳴谷古墳 10. 浜口古墳群A 11. 浜口古墳群B 12. 天神山貝塚 13. 久保地古墳群 14. 瀬戸口古墳 15. 栗山古墳 16. 山北古墳 17. 椿尾古墳 18. 貝原古墳 19. 八熊遺跡 20. 貝原古墳 21. 北園古墳 22. 森畑古墳 23. 矢田古墳群A 24. 矢田古墳群B 25. 田附古墳群 26. 杜古田古墳群 27. 向畑古墳群 28. 後田古墳群 29. 吹切古墳 30. 久米古墳・久米遺跡 31. 瀧の浦古墳 32. 合火屋古墳 33. 脇古墳 34. 葛蒲古墳 35. 三十六古墳群 36. 梶浦古墳群 37. 大坂古墳群 38. 石舟古墳 39. 谷口山古墳 40. 大塚石棺 41. ウスイ遺跡 42. 一の町遺跡 43. 引ヶ浦古墳 44. 林古墳群 45. 出ノ浦古墳群 46. 塊掛古墳群 47. 山添古墳 48. 大上戸古墳群 49. 塚本石棺 50. 古野古墳群 51. 棕ヶ元古墳 52. 畑山古墳群 53. 鰐口古墳群 54. 荒牟田古墳群A 55. 荒牟田古墳群B 56. 相川古墳群 57. 麦田古墳 58. 餅田古墳 59. 釜戸古墳群 60. 中ノ浦古墳群 61. 田代古墳 62. 浦古墳群 63. 東浦古墳群 64. 細浦古墳 65. 柏木古墳群 66. 雪古墳 67. 鬼ノ内古墳 68. 井手古墳 69. 魚津古墳 70. 萩ノ浦古墳 71. 高久保古墳 72. 相古墳 73. 門古墳群 74. 洞古墳群 75. 谷古墳群 76. 宗田古墳 77. 押方古墳群 78. 野引古墳 79. 勝後古墳 80. 大丸古墳 81. 壁田古墳群 82. 釣波古墳群 83. 早稲見ヶ浦古墳群 84. 大才山古墳群 85. 大畑古墳群 86. 井田原開古墳 87. 岸田古墳 88. 四反田古墳群 89. 六所神社古墳 90. 大牟田石棺 91. 籠門古墳群 92. 津和崎権現古墳 93. 宮ノ前古墳 94. 後口古墳 95. 道又古墳A 96. 道又古墳B 97. 石崎石棺 98. 板石古墳 99. 泊大塚古墳 100. 御道具山古墳 101. 泊城崎古墳 102. 泊大日古墳 103. 稲葉古墳群

I. はじめに

(2) 歴史的環境

志摩西部海岸平野には縄文時代以降の遺跡が多く所在する。芥屋の天神山貝塚では縄文時代前～後期の遺物を包含する貝塚が検出されており、新町遺跡では縄文時代後期の遺物とともに両腕に貝輪を装着した熟年女性の人骨が出土している。また、この付近西側にある岐志元村遺跡では縄文時代後期の竪穴住居や縄文時代晩期とみられる十代後半の女性人骨が出土している。

弥生時代に入ると新町遺跡に支石墓を含む墓地が営まれる。昭和61（1986）年から実施された第1次調査では第1地点で支石墓、甕棺墓、土坑墓が合計57基確認され、上石が失われているものも含めるとこのうちの約3分の1が支石墓であったと考えられている。墓からは縄文的な特徴を持つ人骨や柳葉形磨製石鏃が大腿骨に刺さった状態の人骨などが出土しており、弥生時代の成立過程や当時の社会状況を知るうえで重要な資料となっている。ただ、この新町支石墓群では墓以外に住居や水田などの生活に関連する遺構が確認されておらず、長年の課題となっている。新町支石墓群の東側に隣接する御床松原遺跡では弥生時代前期末から古墳時代後期にかけての住居跡が100軒以上検出されている。このうち、弥生時代中期以前の住居は平面形態が円形または不整形で、後期以降になると方形または長方形となる。遺跡からは弥生土器をはじめ、貨泉や半両銭等の中国銭貨、石錘や釣針、アワビオコシなどの漁撈具、その他石斧、石包丁、石鏃、石剣などの石器類が出土しており、当時の人々の暮らしを知る資料となっている。

古墳時代になると糸島地域では数多くの古墳が造られるようになり、現状で約800基が確認されている。このうち志摩地区には約200基があり、その多くは古墳時代後期に築かれた円墳で、12基は前方後円墳である。旧海岸線近くの丘陵上や小平野周辺の丘陵裾部などに多くが分布している。引津湾から芥屋にかけての海岸線近くの丘陵部、加布里湾に面した可也山南麓、小金丸川沿いに開けた小平野周辺の火山南麓と可也山北麓、初川流域の山麓部、桜井川流域の丘陵部などそれぞれに古墳の分布域がある。中でも初川流域には古墳時代前～中期の前方後円墳である津和崎権現古墳、稲葉1号墳、井田原開古墳や古墳時代後期の大型の横穴式石室をもつ後口古墳などが所在しており、志摩地区の首長墓と考えられている。また、桜井川の北方に位置する桜井神社境内の相古墳も巨石を用いた古墳として知られ、こちらも志摩地区における首長墓と考えられている。

今回調査を行った岐志花掛山古墳の北東側には古野古墳群があり、未調査であるが、中には横穴式石室が開口しているものがある。海岸線を北側に行った芥屋には2基の古墳が調査された久保地古墳群がある。近隣の海岸で採取したとみられる六角形柱状節理の玄武岩を重箱積みにした横穴式石室が構築されており、他地域にはみられない珍しい石室の構造と石材が使用されていることから、地域性に富んだ希少な古墳といえる。時期は6世紀末～7世紀と考えられ、須恵器・土師器のほか、鉄剣、鉄鏃、鉄刀子、鉄斧、鉄釣針、ガラス玉、土玉、金環、金製垂飾付耳飾りなど豊富な副葬品が出土していることから、被葬者は芥屋の内湾を掌握し、海上交通にたけた有力者であったと考えられている。

(参考文献)

志摩町教育委員会『志摩町遺跡等分布地図』（1995年）

新修志摩町史編集委員会『新修志摩町史』（2009年）

糸島市教育委員会『井田原開古墳』（2012年）

II. 調査の記録

1. 調査の概要

岐志花掛山古墳は志摩山地西側の丘陵、花掛山の頂上に位置する（第2図）。山頂付近には花崗岩の巨大な露頭がそこかしこにみられ、山の基盤が花崗岩で構成されていることがうかがえる。かつては石材として花崗岩の切り出しも行われていたようで、山の南側斜面には矢穴が彫られた転石が発見でき、関連する遺物として、鉄製の楔（第27図29）も出土している。

山頂からは3方向へ尾根が伸びており、途中には幅が広がった緩斜面がある（第3図）。試掘調査時には須恵器の他に中世期と考えられる瓦質土器の小片等が出土したため、本調査時は、この緩斜面に古墳や中世期の遺構等が存在する可能性を念頭に置いて作業を行った。しかしながら、後世の石材採取によるものか尾根は岩盤近くまで削り取られており、明確な遺構は確認できなかった。

この古墳の石室については地元にお住いの70～80代の男性が子どもの頃に、石室内で遊んだ記憶があると教えてくださった。この話から算定すると昭和20～30年代ごろまでは古墳の石室が残っており、その後、いつのころか破壊されたと推察できる。

2. 遺構と出土遺物

（1）墳丘と外部施設（第4・5図）

岐志花掛山古墳は円墳と考えられたが、調査時には墳丘が大きく削平され、原形をとどめていない状態であった。石室は最下段のみが残っており、周囲にはかつて石室の石材であったと考えられる石が転がっていた。墳丘の西から北にかけては、墳裾に沿って外護列石が残っており、古墳の規模を知る手がかりとなっている。外護列石は1段積みが残っており、約60×50×30cmの石を最大のものとして、石の大きさに応じて横・または縦置きとしている。列石の幅は50～40cm程度で、標高37.0～37.1m付近を石の上端としている。石材はいずれも花崗岩が用いられている。なお、周濠や葺石等、他の外部施設は確認できなかった。

（2）地山整形と墳丘盛土層（第6・7図）

墳丘の調査については、石室を基準として、この主軸方向と直交する方向に畦を設定し、盛土部分を掘り下げ、土層を確認した。ただし、人力で排除不可能なほどの大型の転石が存在する部分については、安全に配慮し、掘り下げを断念している。

墳丘は標高36.6～37.1m付近の地山を平坦に削り出し、この上に盛土を施している。平坦面の規模は8.4×9.5mで不整楕円形となるが、これは後世の削平の影響を受けたためと考えられる。石室の壁面下には石を据えるための土坑を掘り込んでいる。玄室の側壁下については土坑を深く掘り、石を据えた後に裏込めの土や石を充填して安定を図っているが、他の部分については深く掘り込まず、石材を地山である岩盤の上に乗せるような状態となっている。盛土層については平坦面から約30～50cmの高さが残されていた。盛土の土質は場所によって若干の違いがみられ、

Ⅱ. 調査の記録



墳丘北側（A土層）では基本的に茶褐色系、黄褐色系、灰色系、墳丘東側（B土層）では茶褐色系、灰色系、墳丘南側では灰黄褐色系でいずれも粘質土または真砂土を多く使い、北側から東側にかけては2～3種類の土質を積み分けているが、南側ではほぼ単一の土質を使用している。

（3）石室

①石室の構造（第8・9図）

調査前、石室内には混じりのない非常に固く締まった真砂土が詰まっていたため、重機等による古墳の破壊時に土を一度に入れた可能性があると考えられた。

石室は主軸方向をN-80°-Wにとり、引津湾方向に開口する。両袖式の横穴式石室で、規模は、全長3.55m、このうち玄室の長さは2.20m、羨道部の長さは1.35mである。幅は玄室床面の奥壁付近で1.63m、中央付近で1.93m、玄門側で1.73m、袖石部分0.76m、羨門部で1.1mとなる。玄室床面中央付近は少し外へ張り出し、羨道部は袖石から前庭部に向かって徐々に広がる形状となる（第9図）。

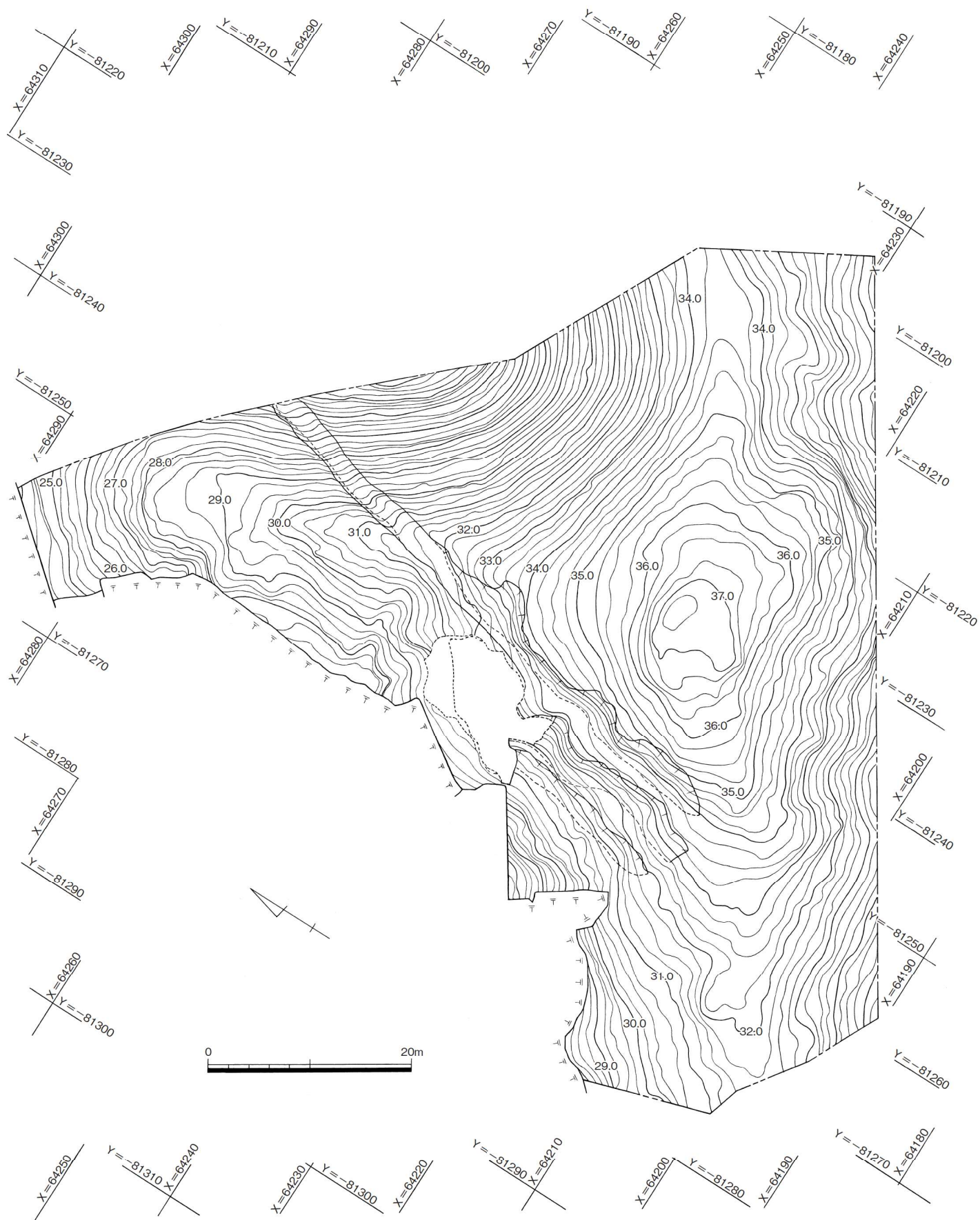
羨道部は閉塞された状態であった。0.15×0.64×0.36mの板石を通路を塞ぐように置き、羨門部方向には塊状の石を複数個詰め込んでいた。これら閉塞石は羨道床面まで積まれておらず、下部は土となっていたが、土層を観察したところ大きく2層に分けられることがわかった。最下層の暗茶褐色粘質土はゆるく、初葬後に自然堆積した土である可能性があり、この上層の赤茶褐色粘質土は花崗岩の礫混じりであり、固く締まることから、最終の追葬時に石と同様に閉塞目的で盛り上げた可能性が考えられる（第8図）。

玄室の奥壁は立方体に近い石を使用しており、向かって左の石は0.85×1.12×0.66m、右の石は1.05×0.83×0.72mを測る。安定しているためか、地山の岩盤を整えた上に置いた状態で、左の石の下端は玄室床面とはほぼ同じ高さ、右の石は玄室床面より2cmほど高くなっている。壁面は内傾しており、床面付近に比べ、石の上端が2～7cmほどせり出している。左側壁は扁平な石を用いており、向かって右の石は0.66×1.23×1.01mで、上端は平坦に近い形状である。左の石は0.41×0.98×0.86mで、上端は斜めとなる。上部には低い部分を補う石が2個ほど残っていた。なお、右の石は左下角の床面に接する部分が抉れた形状となっているため、石室の床面はここが外側へ突出した状態となっている。壁面は内傾しており、床面付近に比べ、石の上端が0～12cmほどせり出している。右側壁も扁平な石を使用している。向かって右の石は本石室内で最大で、0.46×1.01×1.15mを測り、根入れは深い。石の上端の右半分は羨道方向に向かって傾斜している。左の石は0.48×1.34×0.71mを測る。表面には加工痕が観察できなかったが、内面および上端が平滑になっていることから人為的に形を整えた可能性がある。壁面は内傾しており、床面付近に比べ、石の上端が0～9cmほどせり出している。袖石は、立石を用いず、扁平な石を横積みとしている。羨道部の左側壁は4段の石積みが2列残っており、列の隙間には小型の石を充填している。右側壁は袖石が3段積となっており、最上部では目地を揃えるために大きさの異なる石を複数個組んでいる。石室破壊時に石積みがずれたようで、羨門側の石2個が原位置を離れ、傾いた状態であった。石室の石材および閉塞石については、花崗岩が使われている。

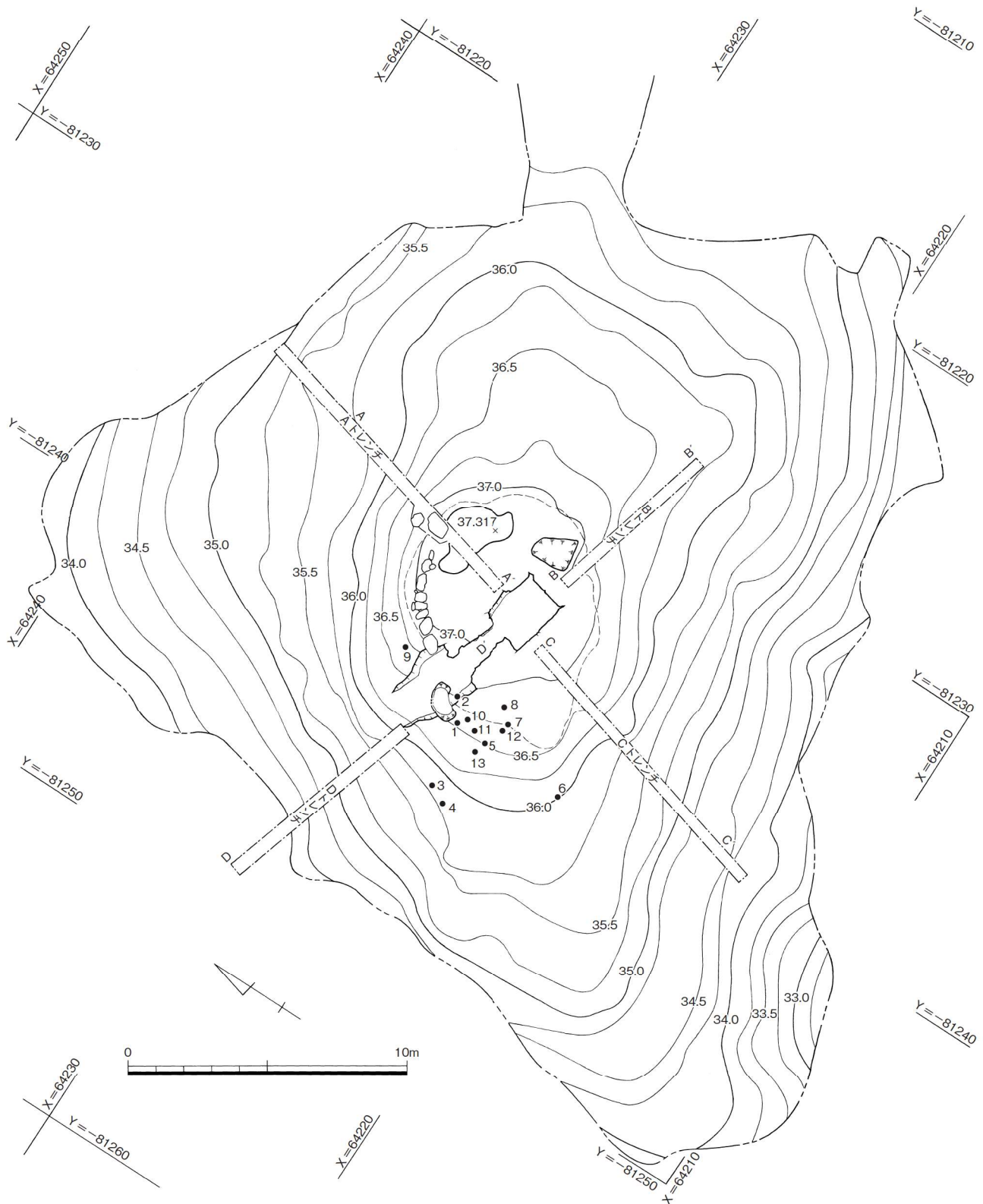
②床面の構造（第10図）

敷石は玄室床面から框石にかけて施されており、その外側については確認されなかった。敷石

II. 調査の記録



第3図 岐志花掛山古墳 調査区地形測量図 (1/500)

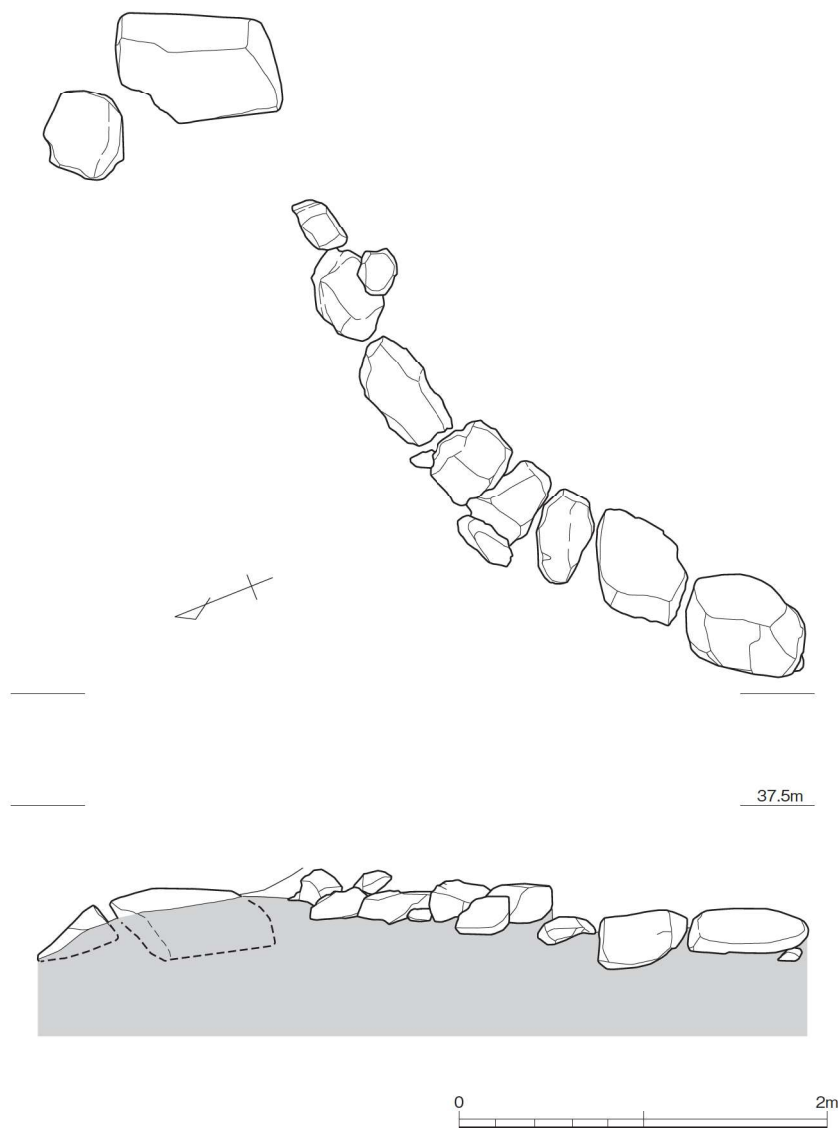


※ 1～13の番号は第19～21図中のNoに対応

第4図 岐志花掛山古墳 墳丘遺存状況測量図 (1/200)

II. 調査の記録

は後世の攪乱等により、中央付近が部分的に失われた状態であったが、壁面周辺では比較的残りが良かった。断面を確認したところ複数回の敷き直しがあることが想定できたが、攪乱により移動している石もあるため、ここでは認定できた上下2面を報告する。なお、上面から順に第1面、第2面としている。第1面は標高36.38～36.34m付近にあり、まばらにしか残っていなかった。また、この面に伴い横長の石と比較的小型の石の2個を並べた框石を新たに積んでいる。第2面は標高36.33～36.31m付近にあり、壁面付近には比較的大きめの石を配置しており、内側には小ぶりの石を敷いている。床面の中央付近には石を立て、他の敷石よりも飛び出した石が2列残っており、南北方向に向かって屍床を並べた可能性がある。労力を節約するためか、この敷石の中には地山の岩盤の盛り上がりを利用したものが2箇所ほど確認でき、本古墳の特徴といえる(第10図第2面の網掛け部分)。敷石および框石の石材はいずれも花崗岩が使われている。



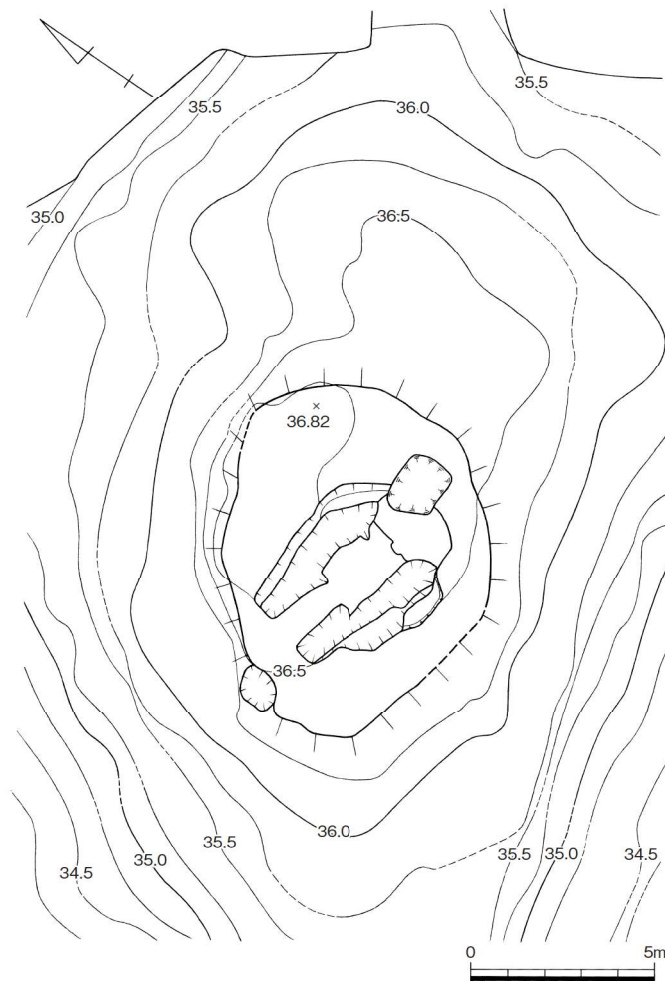
第5図 岐志花掛山古墳 外護列石実測図 (1/40)

③遺物の出土状況（第11図）

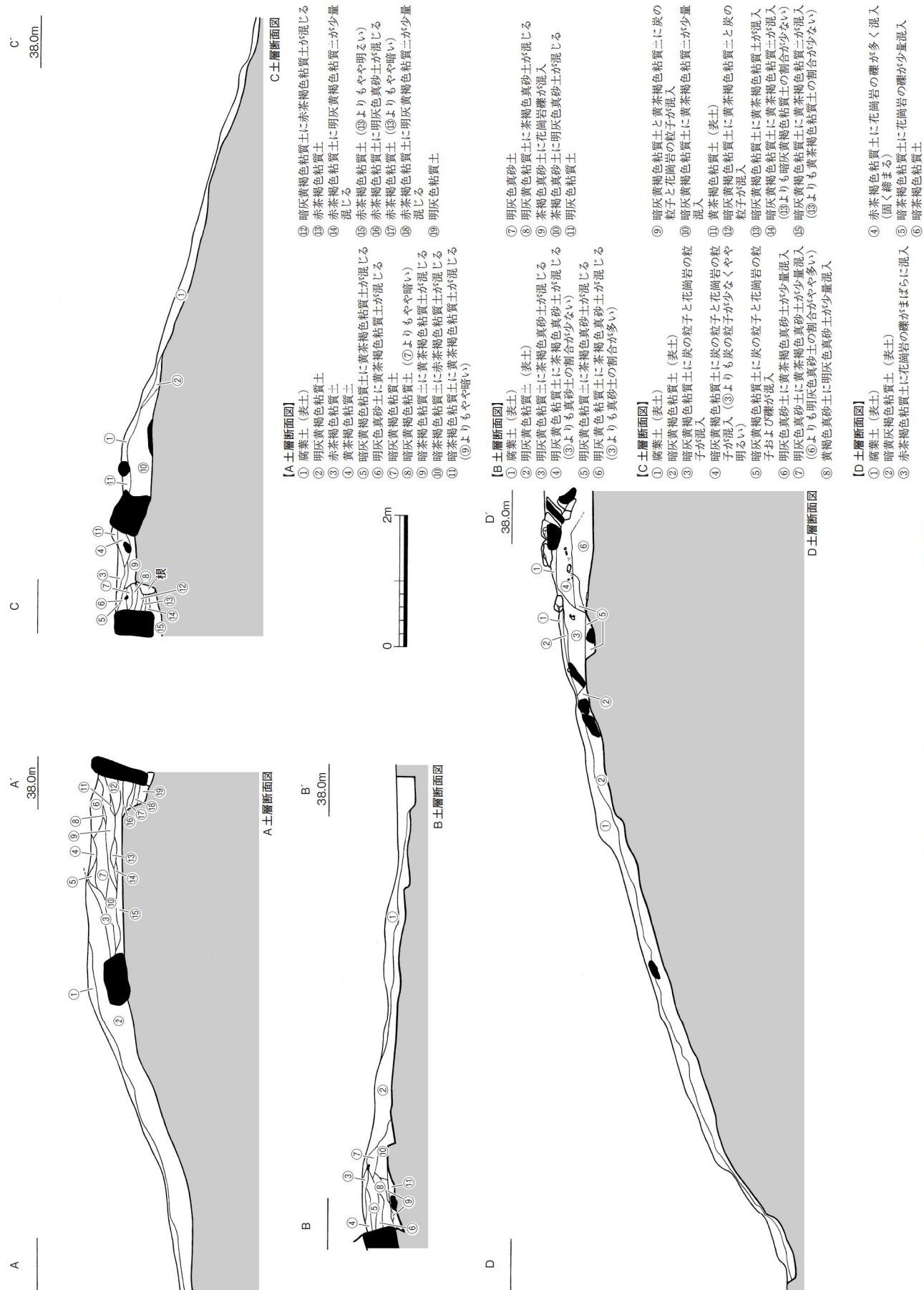
床面からは須恵器・土師器・鉄器・装身具類が出土した。須恵器と土師器の多くは玄門部の左右付近に集められた状態であり、例外はあるが左側に古い時期のもの、右側に新しい時期のものが集められている傾向がみられる。器種は須恵器が坏の身と蓋、提瓶、平瓶、台付壺で土師器は台付碗が確認できた。鉄器は右側壁に沿った部分で多く出土し、鏃、刀子が確認できた。装身具類は攪乱または盗掘を受けたためか、玄室内では耳環1点のみの出土であった。耳環は床面の敷石から5cmほど浮いた状態で検出されているため、この位置が被葬者の頭部にあたるかは確定できなかった。なお、もう一つの装身具類であるガラス小玉は、框石より外の羨道部埋土からの出土である。

④出土遺物（第12～18図）

第12図1は耳環である。表面の鍍金がすべてはがれ、青銅の芯材が露出しており、表面は緑青が覆っているが部分により風化の度合いが異なる。大きさは平面が3.0×2.8cm、断面は0.6×



第6図 岐志花掛山古墳 墳丘地山整形状況測量図（1/200）

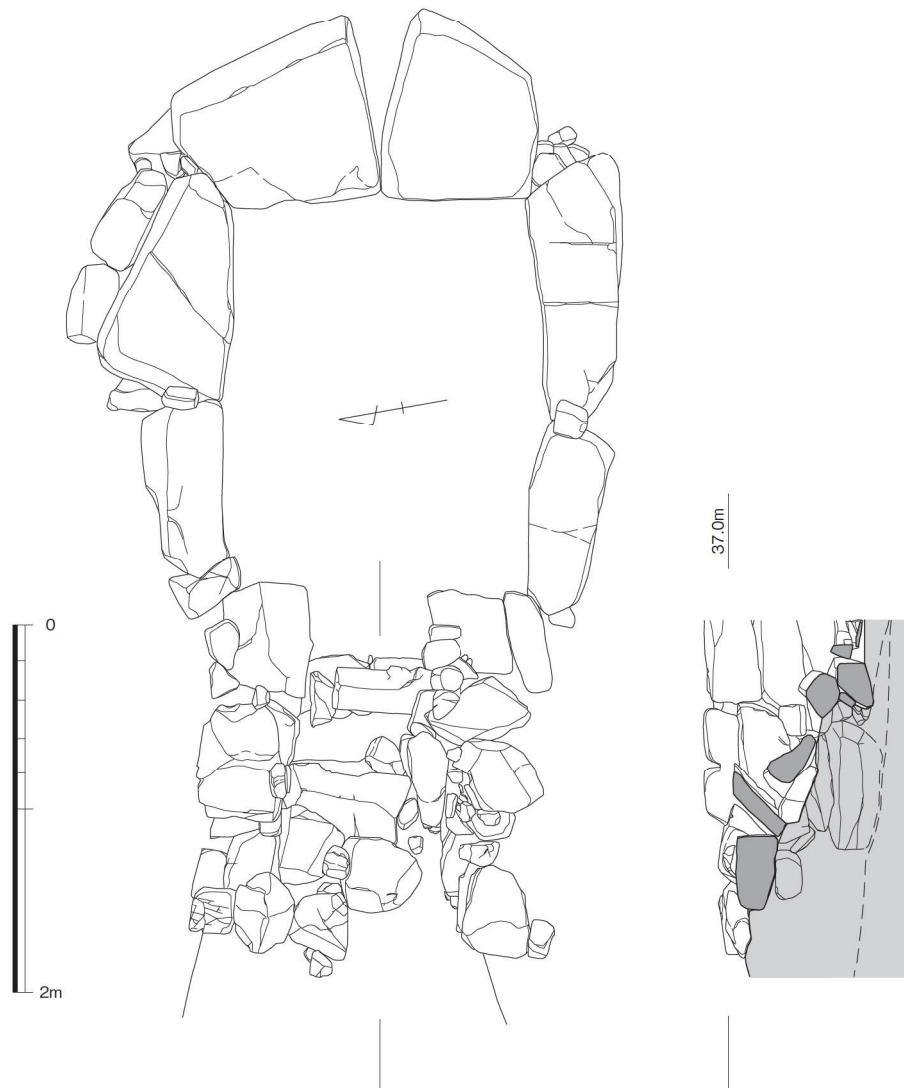


第7図 岐志花掛山古墳 墳丘土層断面実測図 (1/80)

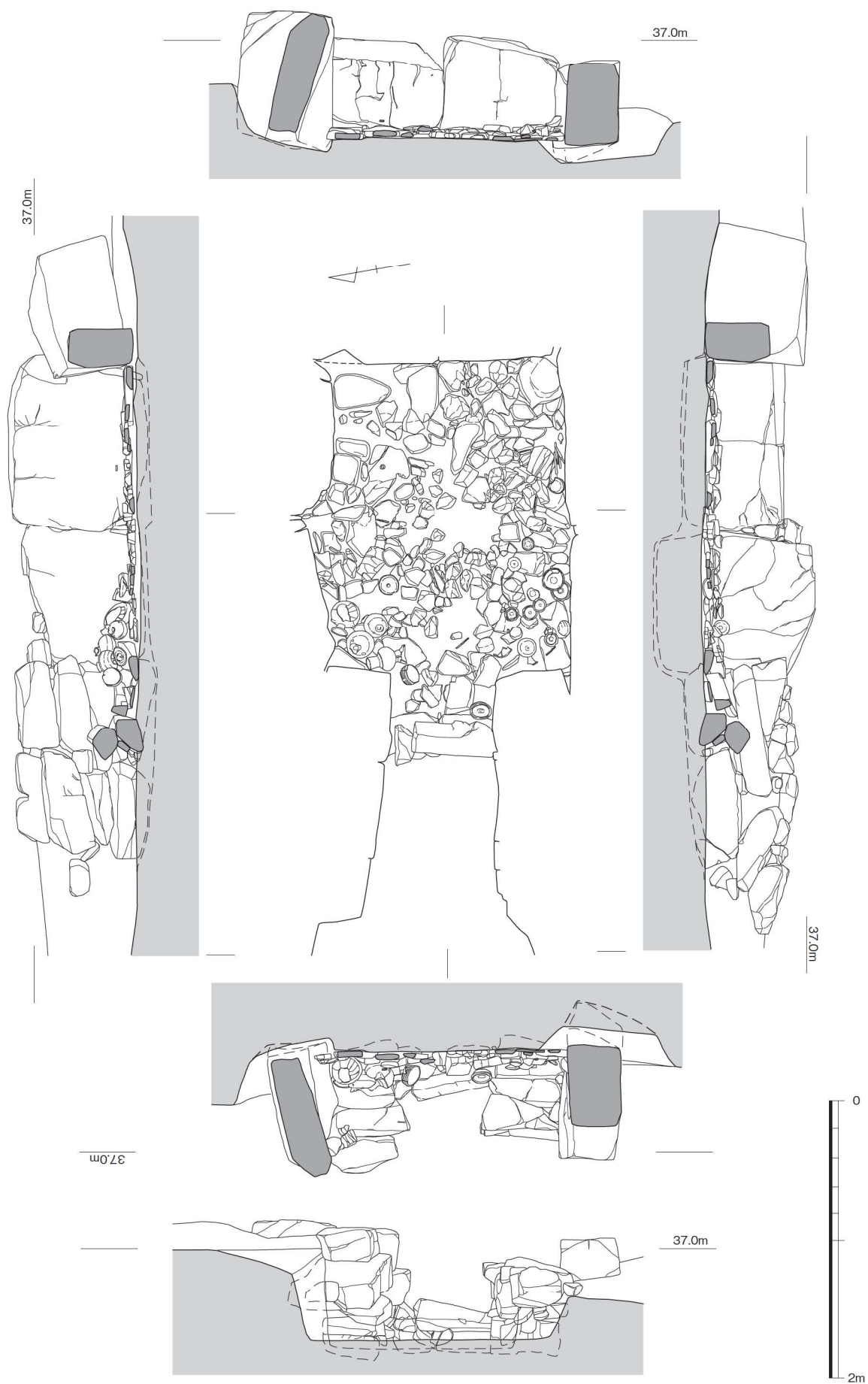
0.6cm、重さは15.13g。

第12図2はガラス小玉である。平面は 0.5×0.5 cmで円形となり、厚みは0.3cmでやや不整形となる。濃青色を呈し、重さは0.11g。

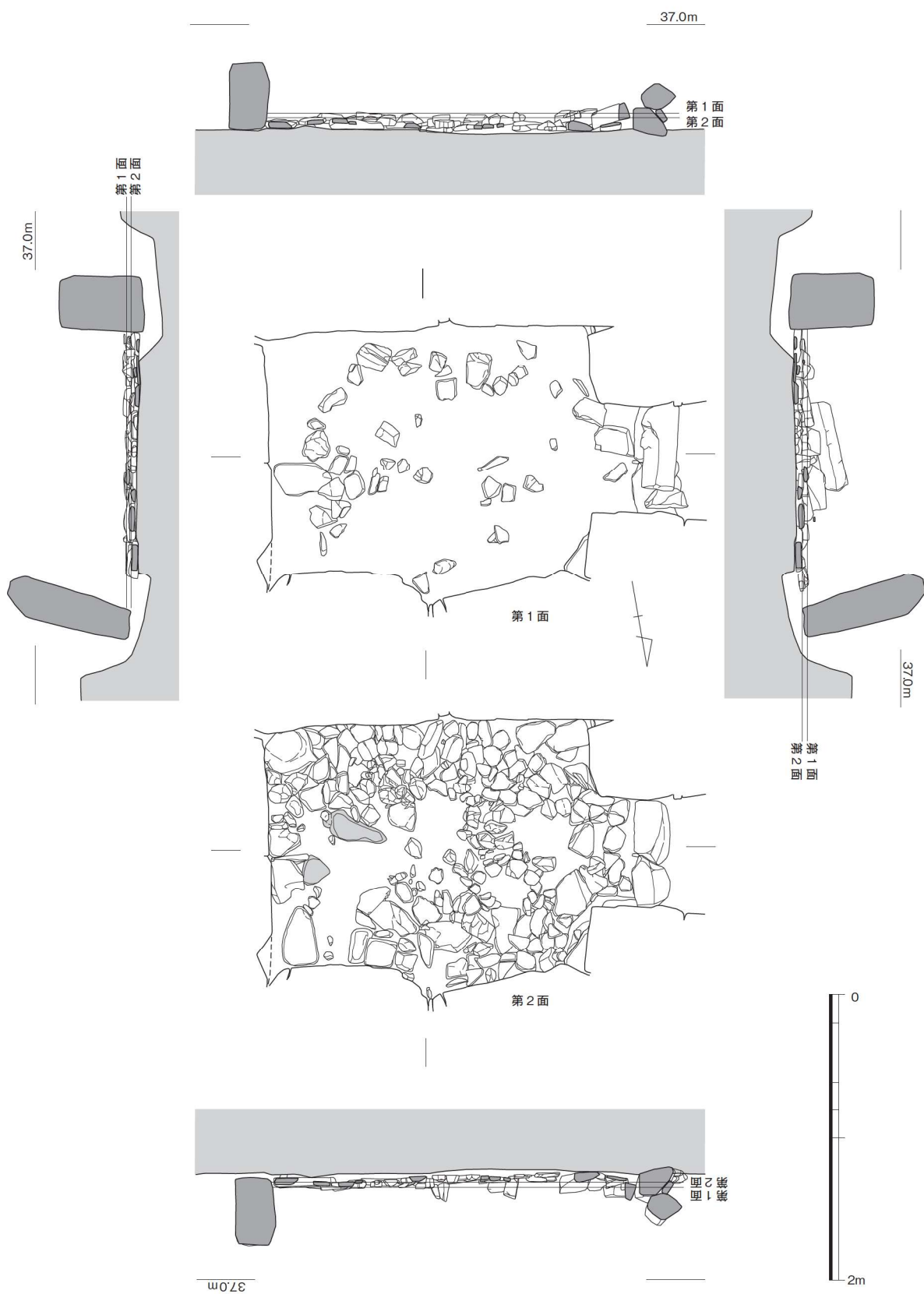
第13図1～8、11、12、第14図13、22は長頸鏃と考えられ、1～3、8、22の茎部には柄の一部と考えられる木質と固定用に巻かれた樹皮が残っている。1は2箇所折れているもののほぼ完形となる。頭部が三角形、大きさは $12.4 \times 1.2 \times 0.6$ cm、重さは14.86g。土圧によるものか頸部がやや反っている。2は1箇所折れているもののほぼ完形となる。頭部は長三角形、大きさは $14.0 \times 1.0 \times 0.8$ cm、重さは17.17g。3は刃部の一部が欠け、3箇所折れているもののほぼ完形となる。頭部は方頭で、大きさは $14.8 \times 0.7 \times 0.5$ cm、重さは17.68g。4は鏃の先端部で、大きさは $1.5 \times 1.2 \times 0.3$ cm、重さは1.12g。5は頭部と頸部の下部が失われ、3箇所折れている。大きさは $14.5 \times 1.0 \times 0.5$ cm、重さは15.92g。6は頸部にあたり、3箇所折れている。大きさは $10.5 \times 0.7 \times 0.5$ cm、重さは8.51g。7は頸部の上部と茎部の下部が失われ、1箇所折れている。



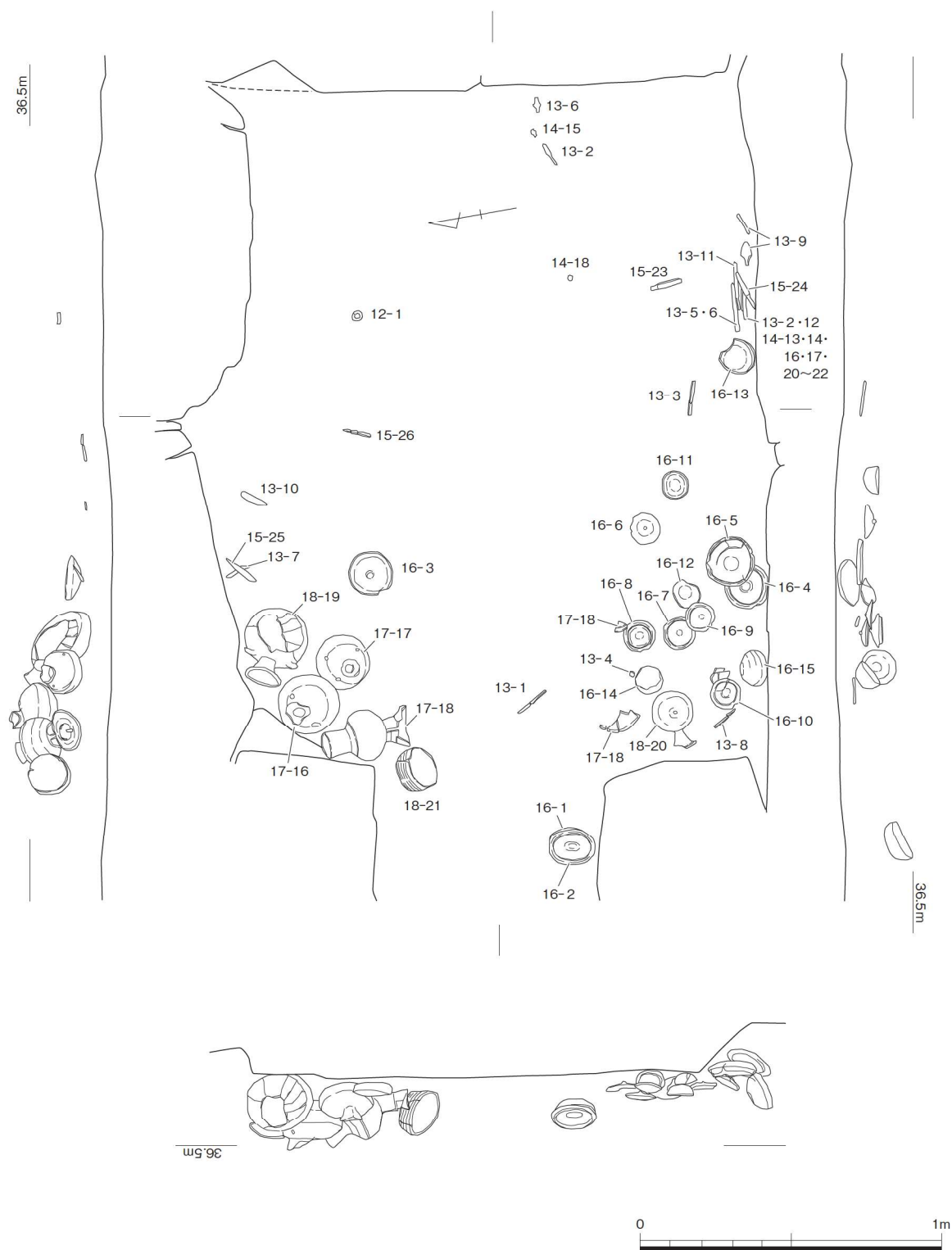
第8図 岐志花掛山古墳 石室上面および羨道部閉塞状況実測図 (1/40)



第9図 岐志花掛山古墳 石室実測図 (1/40)



第10図 岐志花掛山古墳 石室敷石実測図 (1/40)



第11図 岐志花掛山古墳 石室遺物出土状況実測図 (1/20)

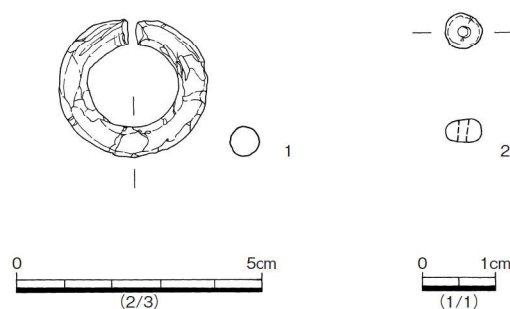
大きさは $9.2 \times 0.8 \times 0.7\text{cm}$ 、重さは 9.87g 。8は頸部の下部から茎部にかけてが残っている。大きさは $14.7 \times 0.8 \times 0.6\text{cm}$ 、重さは 10.19g 。11は頭部から頸部にかけて2箇所折損がある。大きさは $12.6 \times 0.5 \times 0.4\text{cm}$ 、重さは 9.32g 。12は茎部の破片と考えられる。大きさは $4.8 \times 0.9 \times 0.3\text{cm}$ 、重さは 5.15g 。13は関部から茎部にかけての破片と考えられ、大きさは $3.7 \times 0.6 \times 0.4\text{cm}$ 、重さは 3.49g 。22は6本の長頸鏃が先端の向きを揃え、束ねた状態で癒着し、出土した。3本に木質が残り、このうちの1本には樹皮を巻いた状況が確認できた。最も長いものは $19.5 \times 0.7 \times 0.4\text{cm}$ で、全体の重さは 108.11g 。

第13図9は三角形鏃で、先端部付近に欠けがあり、茎部に1箇所の折損があるものの、ほぼ完形である。大きさは $12.6 \times 3.5 \times 0.8\text{cm}$ 、重さは 27.54g 。頸部には柄の一部と考えられる木質が残っている。

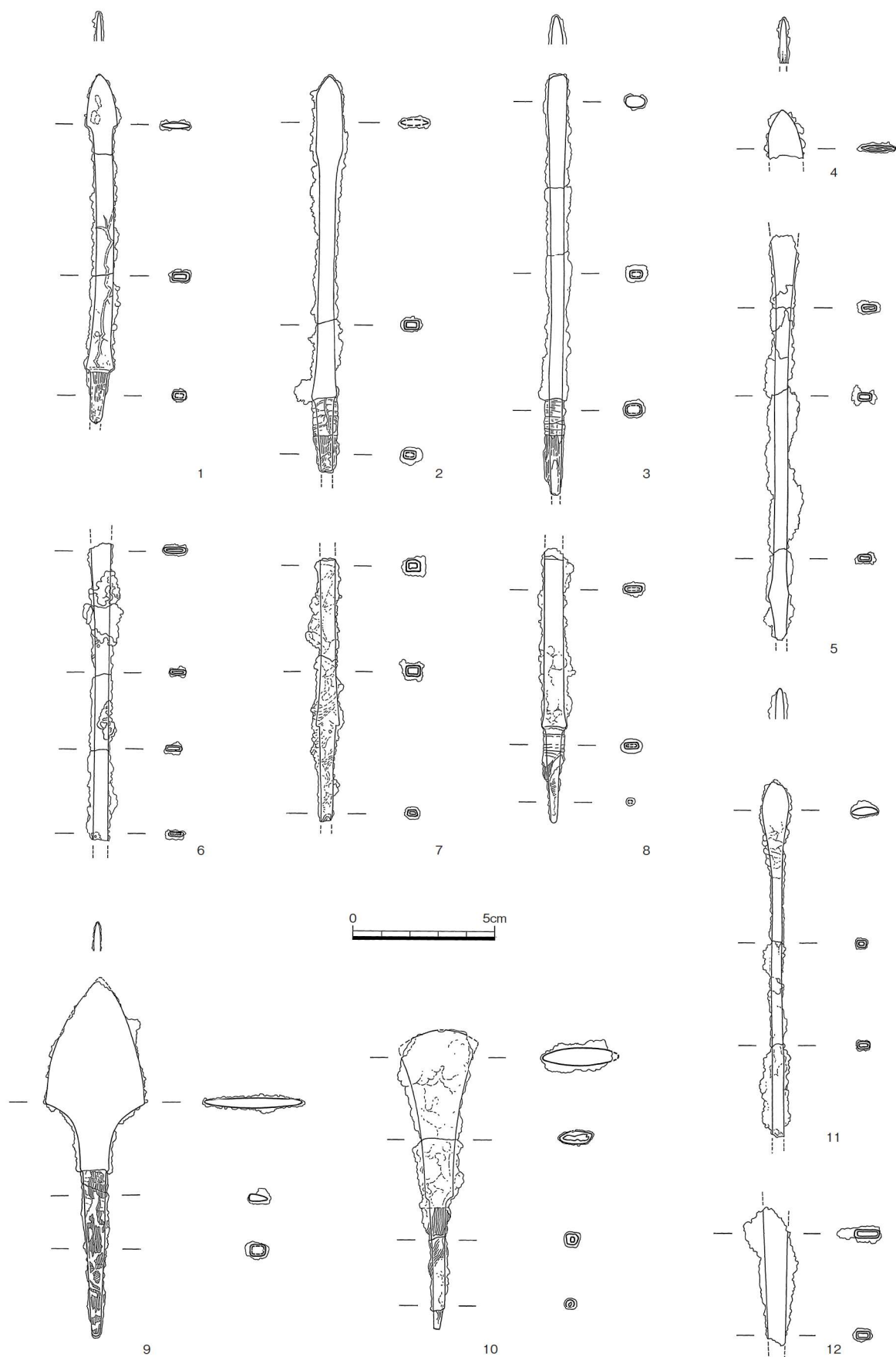
第13図10は方頭鏃で、刃部に欠けがあり、3箇所で折損があるもののほぼ完形となる。大きさは $10.5 \times 2.5 \times 1.0\text{cm}$ 、重さは 21.04g 。刃部は弧をもち、茎部には柄の一部と考えられる木質が残っている。

第14図14～21は鉄鏃の茎部の破片と考えられ、このうち16・18・20・21は先端部の付近に当たり、14～18・20・21では柄の一部と考えられる木質が残っている。14は大きさ $5.3 \times 0.3 \times 0.3\text{cm}$ 、重さは 1.09g で、2箇所で折損している。15は大きさ $4.4 \times 0.4 \times 0.4\text{cm}$ 、重さは 3.82g である。16は大きさ $3.8 \times 0.3 \times 0.3\text{cm}$ 、重さは 1.25g 。17は大きさ $2.3 \times 0.8 \times 0.7\text{cm}$ 、重さは 0.88g 。18は大きさ $3.0 \times 1.0 \times 0.8\text{cm}$ 、重さは 1.50g 。19は大きさ $0.8 \times 0.3 \times 0.3\text{cm}$ 、重さは 0.14g 。20は大きさ $1.9 \times 0.4 \times 0.4\text{cm}$ 、重さは 0.34g 。21は大きさ $2.2 \times 0.5 \times 0.4\text{cm}$ 、重さは 0.57g 。

第15図23～28は鉄刀子と考えられる。このうち、23～26では茎部に柄の一部と考えられる木質が残っている。23は先端部の一部を失うもののほぼ完形で、2箇所で折損している。大きさは $13.1 \times 1.8 \times 0.8\text{cm}$ 、重さは 20.23g 。24は刃部の鋒付近を失っている。大きさは $10.8 \times 2.0 \times 0.8\text{cm}$ で、重さは 24.95g 、刃部は幅に対しやや厚みを持つ。25は刃部の半ばから鋒付近を失っているものの鞘口金具が残っている。大きさは $10.9 \times 2.1 \times 1.7\text{cm}$ 、重さは 27.36g 。26は刃部の半ばから鋒付近を失っており、2箇所で折損している。大きさは $9.3 \times 1.3 \times 0.4\text{cm}$ 、重さは 10.24g で、茎部に木質が残っており、柄の一部と考えられる。27は刃部の破片で大きさは $3.6 \times 1.8 \times 0.6\text{cm}$ 、重さは 16.12g 。28は関付近～茎部の破片と考えられ、大きさは $2.5 \times 1.8 \times 0.5\text{cm}$ 、重さは 3.10g 。

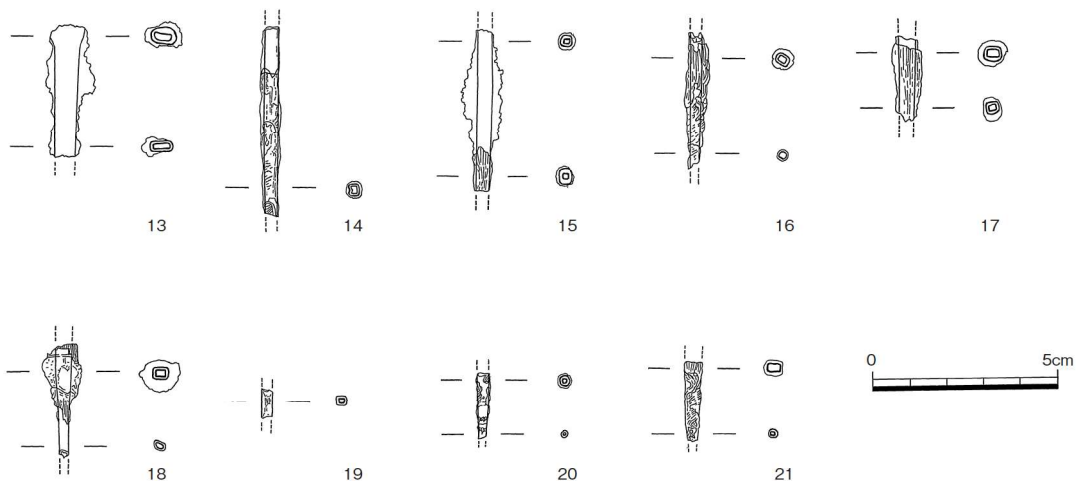
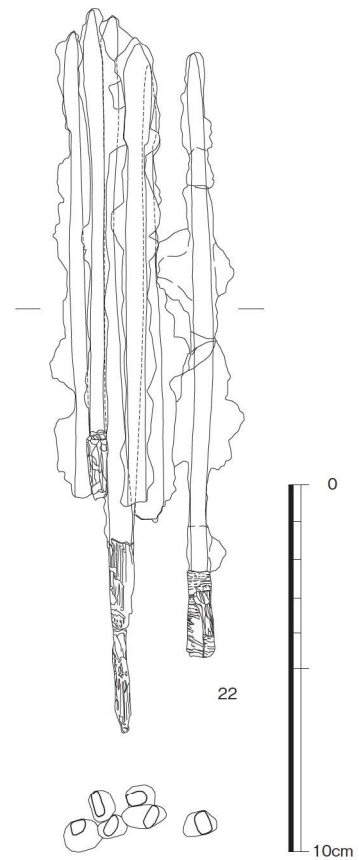


第12図 岐志花掛山古墳 石室出土装身具実測図 (1/1・2/3)



第13図 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器実測図1 (1/2)

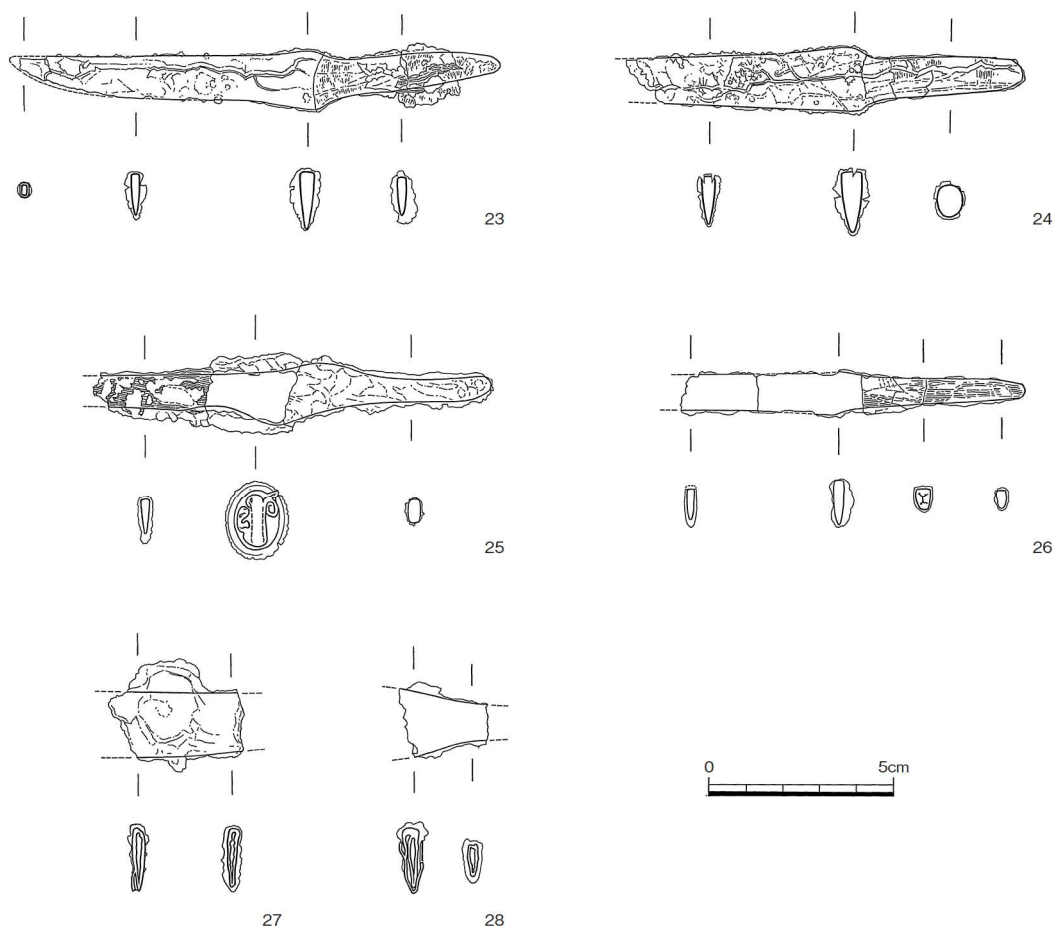
第16図1～15は須恵器杯の蓋と身である。完形または完形に近い状態で出土しており、2は底部内面に同心円のあて具の痕跡が残り、6・7・9・10・11・13では天井部または底部の外面に木の葉形のヘラ記号が入る。1と2は重なった状態で検出された。1は天井部が平坦で、外面の約1/4の高さに反時計回りの粗いヘラケズリを施し、天井部と口縁部とを分ける凹線を巡らせる。口縁部はやや外反し、端部は内傾するとともにわずかな段が入る。口縁部径14.4cm、器高4.1cm。2は焼けひずみがあり、表面には火ぶくれが数か所とこれが破裂した部分がみられる。底面は平坦で、外面の約1/3の高さに時計回りのヘラケズリを施す。立ち上がりはやや外反しながら内傾し、端部はつまみ出し、丸くおさめる。受け部は上方へ伸び、立ち上がりとの境界に浅い沈線を巡らせる。口縁部径12.0cm、器高4.0cm。3は天井部がやや丸みを持ち、外面の約1/4の高さに時計回りの粗いヘラケズリを施し、天井部と口縁部とを分ける凹線を巡らせる。口縁部は内湾しながら開き、端部は丸くおさめる。口縁部径14.2cm、器高4.4cm。4は底面がやや丸みを持ち、外面の約1/5の高さに時計回りのヘラケズリを施す。立ち上がりは低く、やや外反しながら内傾し、端部はつまみ出し、丸くおさめる。受け部は横方向へ伸び、立ち上がりとの境界に浅い沈線を巡らせる。口縁部径12.3cm、器高4.7cm。5は底面がやや丸みを持ち、外面の約1/4の高さに反時計回りのヘラケズリを施す。立ち上がりはやや外反しながら内傾し、受け部は上方へ短く伸び、この境界には沈線を巡らせる。口縁部径12.5cm、器



第14図 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器実測図2 (1/2)

II. 調査の記録

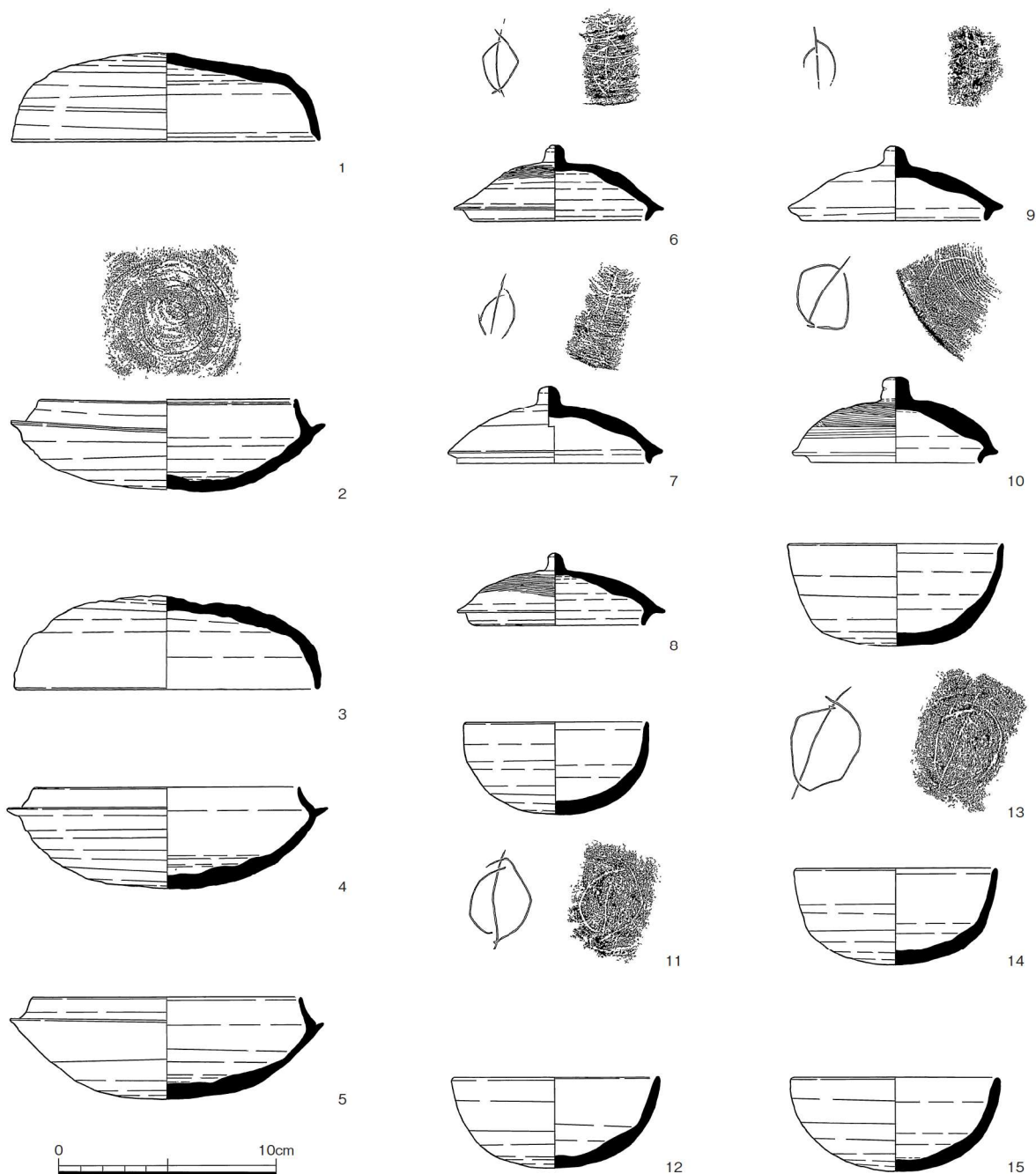
高4.8cm。6は天井部が丸みをもち、中央にはつまみが付く。外面の約1/4の高さに反時計回りのカキ目が施され、内面にはかえりがあり、口縁端部はかえり端部よりも下方へ突出している。口縁部径8.0cm、器高3.5cm。7は天井部が丸みをもち、中央からややずれた位置につまみが付く。外面のヘラ記号は器面の摩滅に伴い下端が消えている。内面にはかえりがあり、口縁端部はかえり端部よりも下方へ突出している。口縁部径8.9cm、器高は3.7cm。8は天井部が丸みをもち、中央にはつまみが付く。外面の1/4の高さに反時計回りのカキ目が施される。内面にはかえりがあり、口縁端部はかえり端部よりも下方へ突出している。口縁部径8.0cm、器高3.4cm。9は天井部が丸みをもち、中央につまみが付く。外面にはヘラ記号が入るが、下半分は器面の摩滅に伴い、消えている。内面にはかえりがあり、口縁端部はかえり端部よりも下方へ突き出している。口縁部径8.5cm、器高は3.5cm。10は天井部が丸く、中央にはつまみが付く。外面の1/2程度の高さに時計回りのカキ目が施され、口縁端部はかえり端部よりも下方へ突き出している。口縁部径7.9cm、器高4.0cm。11は底部が丸みをもち、体部は内湾しながら口縁部に向かって直立し、口縁端部はつまみ出し丸くおさめる。外面の1/5の高さまで時計回りにヘラケズリを施す。口縁部径8.5cm、器高4.3cm。12は底部が丸みをもち、体部は内湾しながら口縁部に向かってやや外側へ開き、口縁端部は丸くおさめる。外面の約1/3の高さまで時計回りにヘラケズリを施す。口縁部径9.6cm、器高4.2cm。13は底部が丸みをもち、体部は深く、内湾しながら口縁部に向か



第15図 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器実測図3 (1/2)

ってやや外側に向かって開き、口縁端部は丸くおさめる。外面の約1/2の高さまで時計回りにヘラケズリを施す。口縁部径9.8cm、器高4.5cm。14は底部が丸みをもち、体部は口縁部に向かってやや外側へ開き、口縁端部は丸くおさめる。外面の約1/3の高さまで時計回りにヘラケズリを施す。口縁部径9.4cm、器高4.5cm。15は底部が丸みをもち、体部は内湾しながら口縁に向かってやや外側へ開き、口縁端部は丸くおさめる。外面の約1/2の高さまで反時計回りにヘラケズリを施す。口縁部径9.8cm、器高4.3cm。

第17図16・17は須恵器の平瓶である。16は口縁部を失っているほかは良好に残る。頸部は太

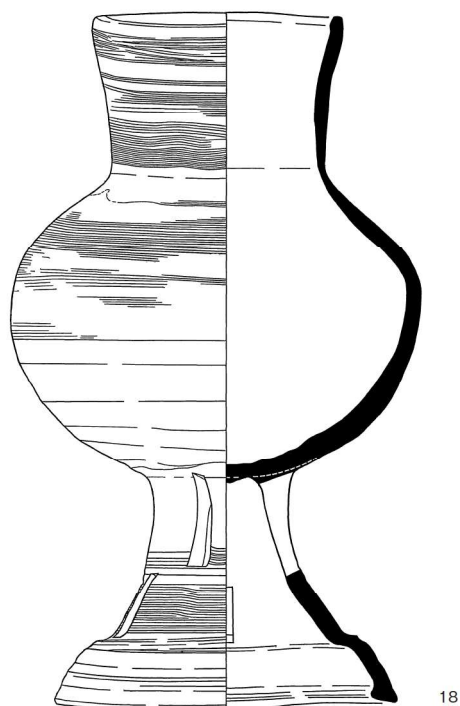
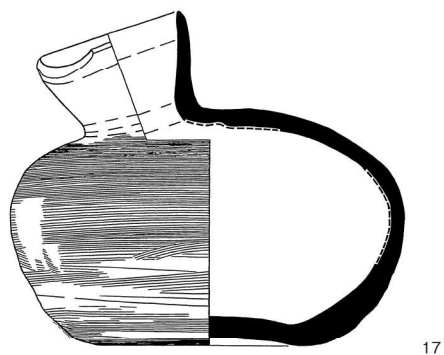
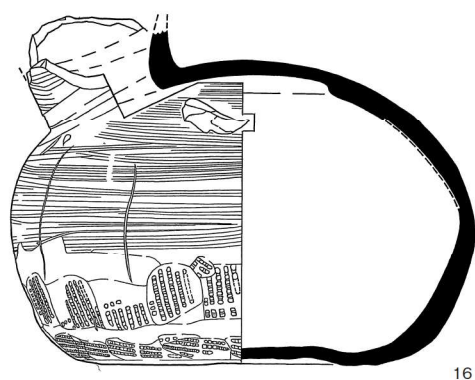


第16図 岐志花掛山古墳 石室出土土器実測図1 (1/3)

くやや外反している。体部は扁球形で、上面は丸みをもち、中位付近には最大径があり、ここに甘い稜が入る。底部はやや上げ底となっている。体部の上位から頸部にかけてはカキ目調整が行われ、下部には格子タタキ目が残り、肩部には2箇所扁平な粘土を貼り付ける。体部の最大径19.4cm、残存する器高14.4cm。17は口縁部の一部を失うもののほぼ完形である。体部は扁球形で、上位に最大径があり、底部はやや上げ底となっている。肩部から底部付近にかけてカキ目調整が行われ、肩部には2箇所に扁平な粘土を貼り付けている。口縁部径6.1～6.7cm、体部最大径は16.2cm、残存する器高13.8cm。

第17図18は須恵器の台付壺である。脚部が割れ、破片が散らばった状態で出土したものの、ほぼ完形に復元できた。頸部の付け根は太く、口縁部に向かって直線状に立ち上がり、口縁端部でやや開く。口縁端部は丸くおさめるがやや内側に肥厚する。体部は球体で上位に最大径をもち、脚部は1条の突帯によって2段に区分される。上下段それぞれには3方向に長方形の透かしが開けられ、千鳥状に配置されている。外面は口縁部から脚部にかけてカキ目調整が施されている。口縁部径10.2cm、器高28.8cm。

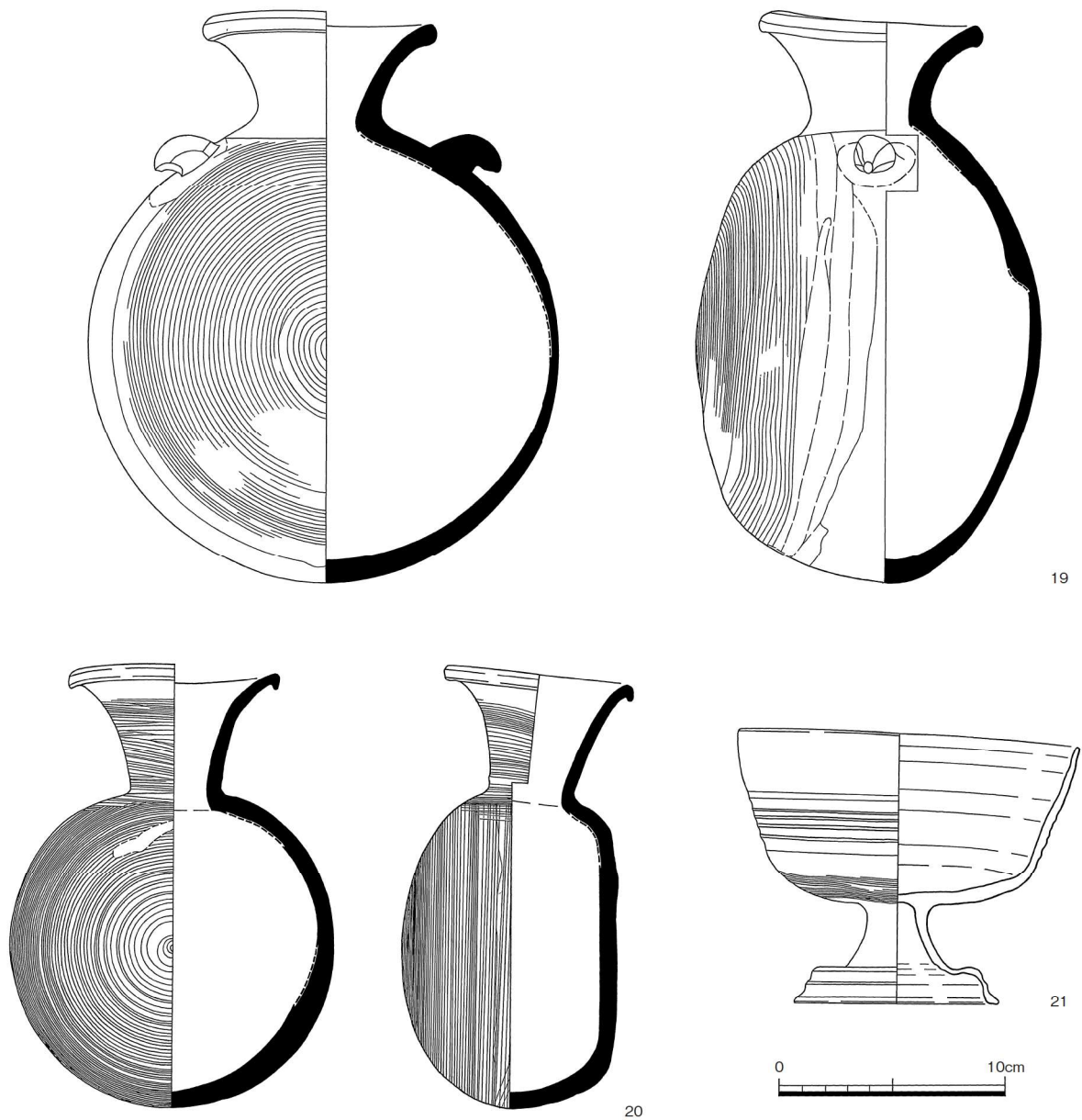
第18図19・20は須恵器の提瓶である。19は体部が割れるもののほぼ完形である。頸部付け根は細く、口縁部に向かって外反しながら広がり、口縁端部は下へ伸ばし丸くおさめる。体部外面



第17図 岐志花掛山古墳 石室出土土器実測図2 (1/3)

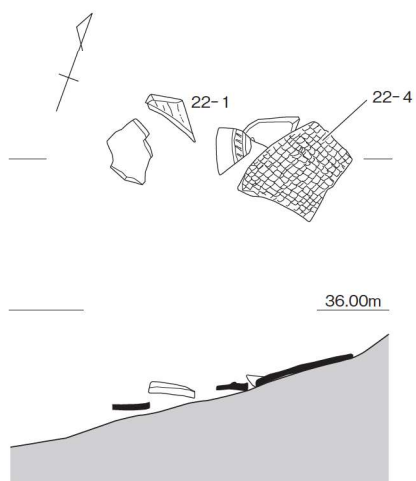
の片面には回転カキ目調整を施しており、肩部には鍵状の把手を2箇所貼り付けている。口縁部径9.9cm、胴部最大径21.0cm、器高25.6cm。20は口縁部の3/4程度を欠いているもののほぼ完形である。頸部の付け根は細く、口縁部に向かってやや外反しながら広がる。口縁部は下へ伸ばし、平らにおさめる。体部の両面に回転カキ目調整を施しており、頸部もカキ目調整を行う。口縁部復元径8.3cm、体部最大径14.5cm、器高19.6cm。

第18図21は土師器の台付碗である。脚端部付近を2/3ほど失うもののほぼ完形で、焼けひずみがある。器壁は薄く、非常に脆い。体部は深く、口縁部に向かって緩やかに内湾しながら外へ広がり、脚部は下面近くで大きく屈曲し、裾を広げる。体部の中央付近には6条、脚部には2条

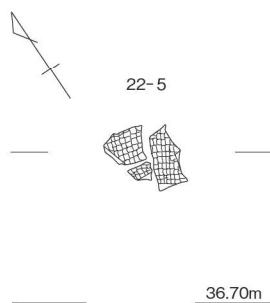


第18図 岐志花掛山古墳 石室出土土器実測図3 (1/3)

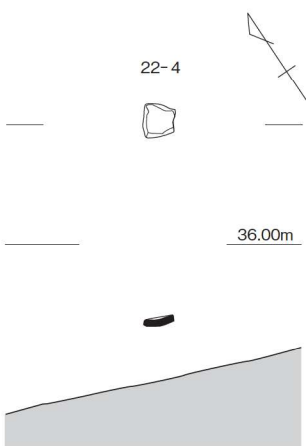
II. 調査の記録



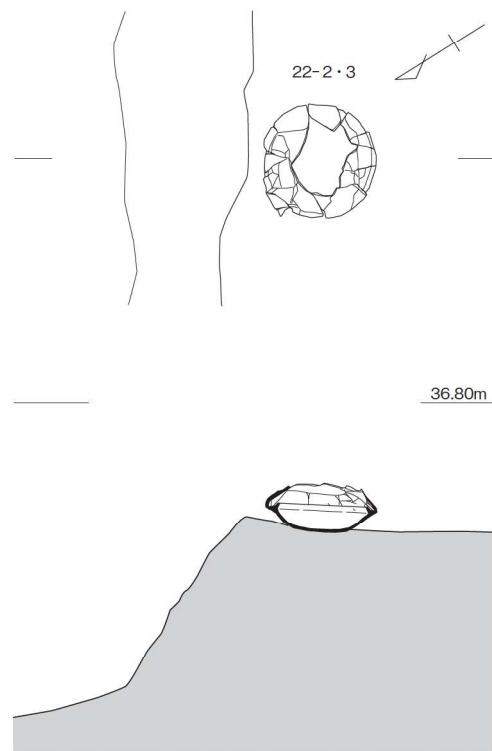
No. 1



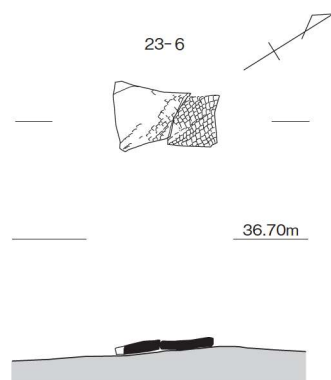
No. 3



No. 4



No. 2



No. 5



第19図 岐志花掛山古墳 墳丘土器出土状況実測図1 (1/10)

の沈線が巡らされており、体部外面の底部付近にはカキ目が施される。口縁部径14.4～15.5cm、器高12.1cm、底部復元径は9.2cm。

(4) 墳丘出土遺物

①遺物の出土状況（第19～21図）

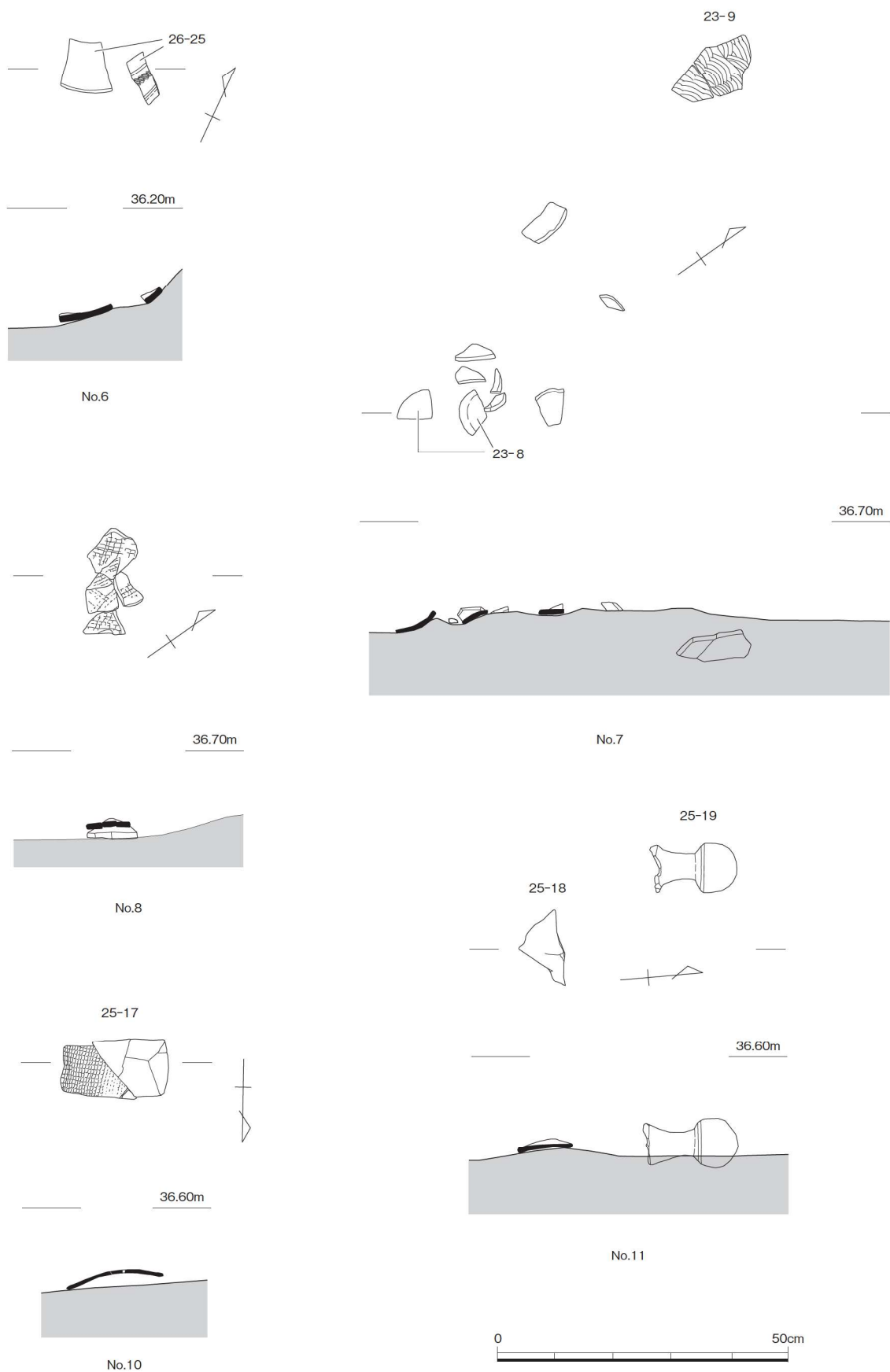
古墳の南から西側にかけて遺物が出土した。第19図No. 2は前庭部の南側から出土した坏の蓋と身で（第22図2・3）、組み合った状態で検出されており、元の位置に近いと考えられる。この他の遺物については破片が散在した状態となっており、墳丘上から転落し、原位置を止めていない可能性が高いと判断される。

②出土遺物（第22～27図）

第22図1は須恵器の高坏で、一部分を失っているものの全体の残りは良い。坏部の外面には2条の突帯を巡らせ、この間に櫛描き列点文を施す。脚部は長脚で、中央に1条の突帯を巡らせ、2段の長方形透かしを3箇所配置する。裾は大きく広がり、端部は上下に伸ばす。口縁部径12.5cm、器高21.9cm。

第22図2・3、第23図7・8、第24図10・11・13～15、第26図20、第27図26は須恵器坏の蓋または身である。2はほぼ完形に復元できるが、焼けひずみがある。天井部は丸みをもち、内面には同心円のあて具の痕跡が残り、外面の約1/4の高さに時計回りのヘラケズリが施される。口縁部はやや内湾し、端部は内傾するとともにわずかな段が入る。口縁部径14.4cm、器高4.1cm。3はほぼ完形に復元できるが、全体に焼けひずみがある。底面は平坦で、外面の約1/6の高さに時計回りのヘラケズリが施される。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部はつまみ出し丸くおさめ、受け部は上方へ伸びる。口縁部径12.0cm、器高3.8cm。7は全体の約1/3が残る。底部は丸みをもち、約1/3の高さまで反時計回りのヘラケズリが施される。口縁部付近は厚く、端部は丸くおさめる。受け部は横方向へ伸び、立ち上がりとの境界に浅い沈線を巡らせる。口縁部径11.0cm、器高4.5cm。8は底部のみの破片である。底部は平坦で、時計回りのヘラケズリが施されている。10と11は蓋と身が上下逆さまに組み合った状態で出土している（第21図No. 9）。10は割れているものの完形に復元できた。天井部は丸みをもち、外面の約1/4の高さに時計回りのヘラケズリを施す。口縁部はやや内湾し、端部は丸くおさめる。口縁部径13.8cm、器高4.7cm。11はほぼ完形である。底部はやや丸みをもち、外面の約1/3の高さに反時計回りのヘラケズリを施す。立ち上がりはやや外反しながら内傾し、端部はつまみ出し、丸くおさめる。受け部は上方に伸びる。口縁部径12.5cm、器高4.8cm。13は1/6程度の破片である。天井部は丸みをもち、外面の約1/4の高さに反時計回りのヘラケズリを施す。口縁部は内湾し、端部はつまみ出し、丸くおさめる。口縁部復元径12.3cm、器高は推定で3.8cm。14は口縁部の約3/4を失い、15は約1/2が残存する。いずれも底部は丸みをもち、外面の約1/3の高さに反時計回りのヘラケズリを施す。立ち上がりはやや外反しながら内傾し、端部は丸くおさめる。受け部は14では上方向、15では横方向へ伸び、いずれも立ち上がりとの境界に浅い沈線を巡らせる。14は口縁部復元径11.0cm、器高4.2cm、15は口縁部径12.7cm、器高4.4cm。20は口縁部の約1/2を欠いているものの全体がわかる。底面は丸みをもち、内面には同心円のあて具の痕跡があり、外面の約1/3の高さに反時計回りのヘラケズリを施す。立ち上がりは直線状に内傾し、受け部は

II. 調査の記録

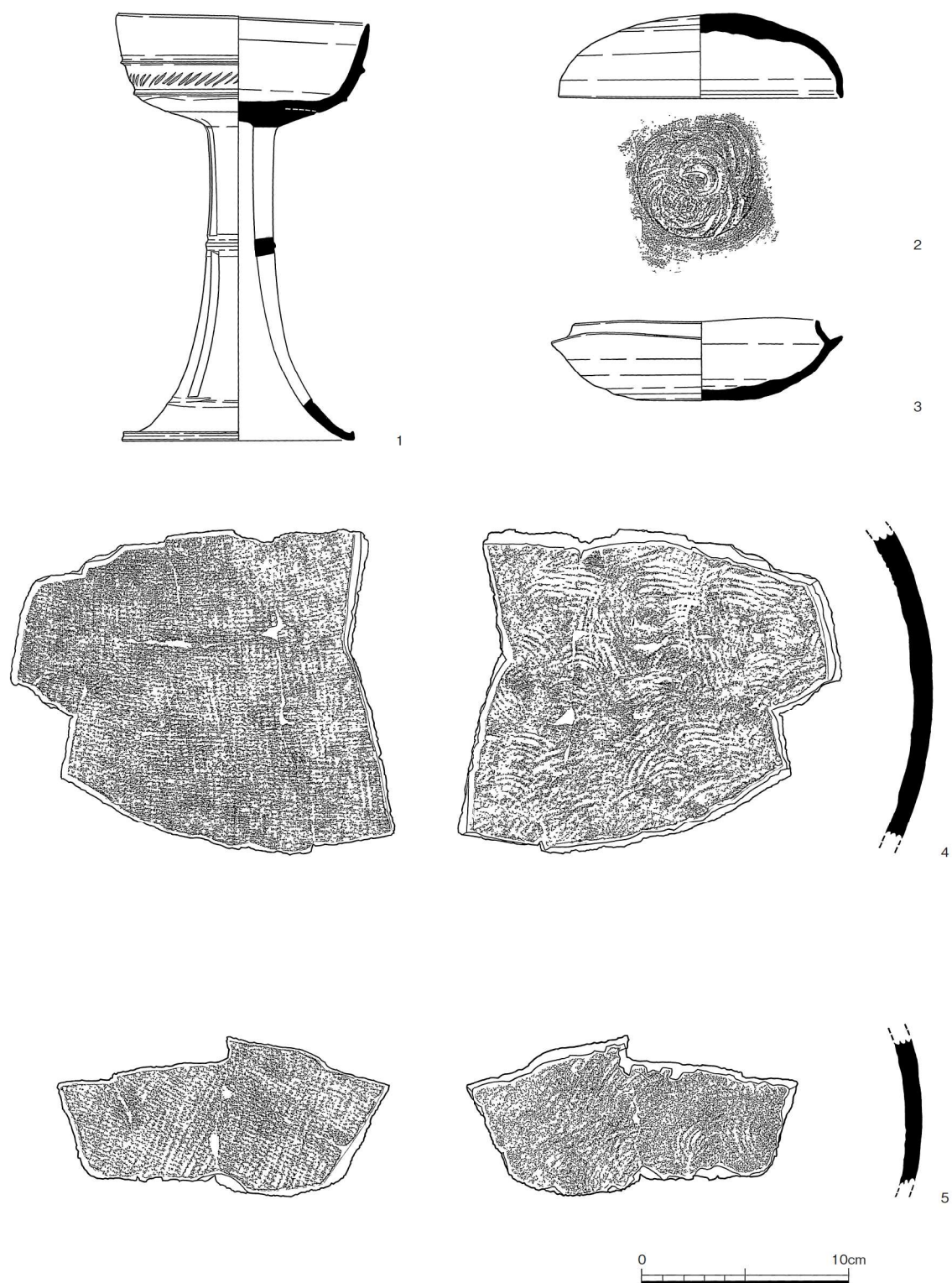


第20図 岐志花掛山古墳 墳丘土器出土状況実測図2 (1/10)

2. 遺構と出土遺物



第21図 岐志花掛山古墳 墳丘土器出土状況実測図3 (1/10)

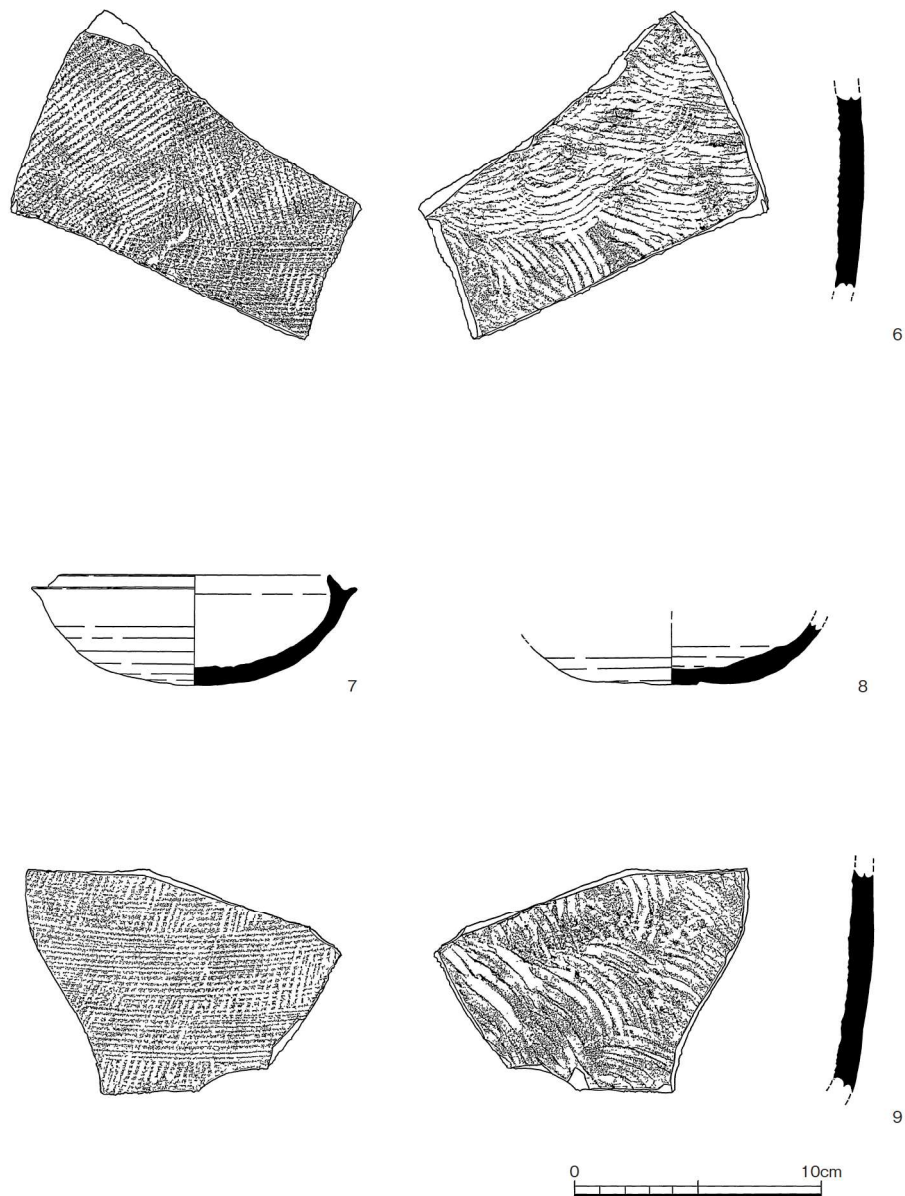


第22図 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器実測図1 (1/3)

横方向へ伸びる。立ち上がりと受け部との境界には浅い沈線を巡らせる。口縁部径12.2cm、器高4.6cm。26は接点がないため2つの破片に分かれた状態となったが同一個体と考えられる。天井部は丸みをもち、外面の約1/4の高さに時計回りのヘラケズリを施す。口縁部は内湾し、端部はつまみ出して丸くおさめる。口縁部復元径12.3cm、器高は推定で3.8cm。

第22図4・5、第23図6・9、第24図16、第25図17・18、第26図21、第27図27は須恵器甕の体部と考えられる。外面に格子目タタキ、内面に同心円タタキが施される。

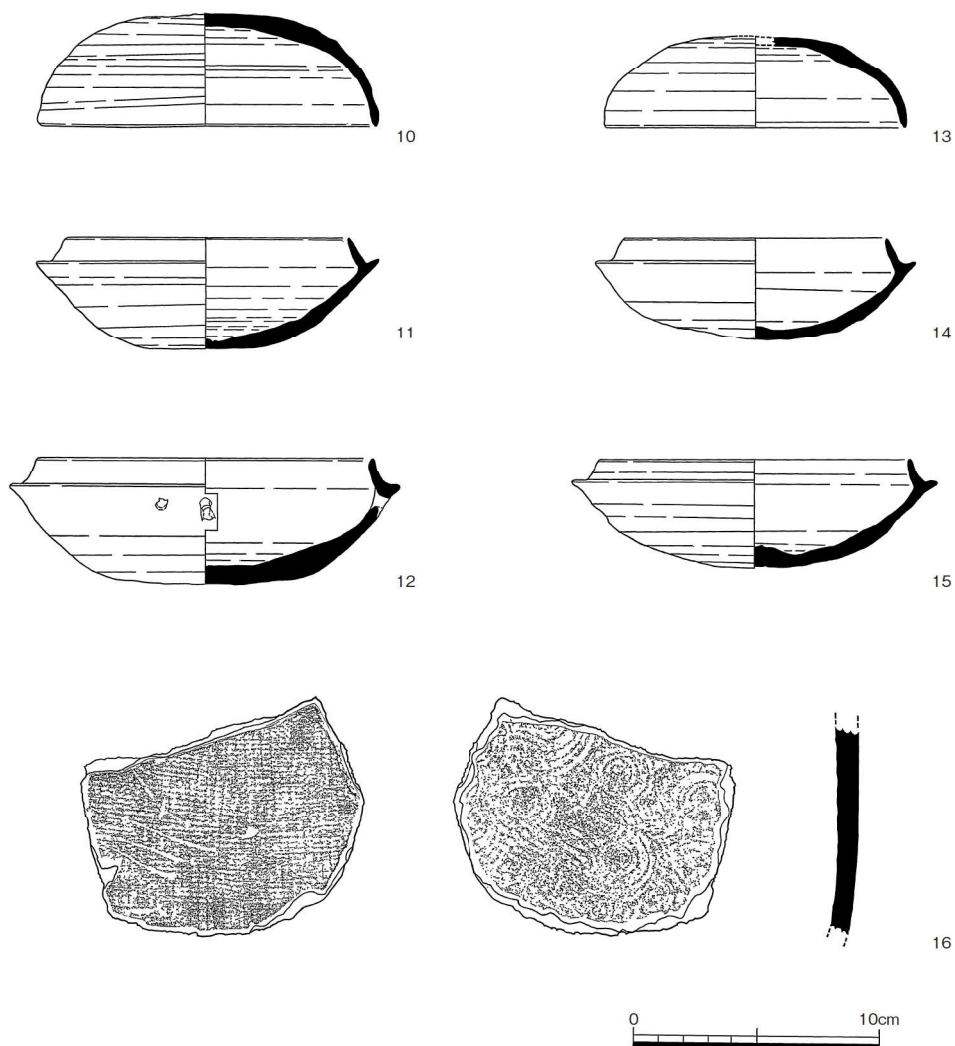
第24図12は赤焼けの須恵器と考えられ、約1/3が残存している。底部には平坦面があり、受け部の下に2つの穿孔がある。穿孔は焼成後に外面から内面に向かって開けられるが、用途は不明である。立ち上がりは厚く、外反しながら内傾し、端部は丸くおさめる。外面にヘラケズリの痕跡は残っていない。口縁部復元径13.8cm、器高5.7cm。



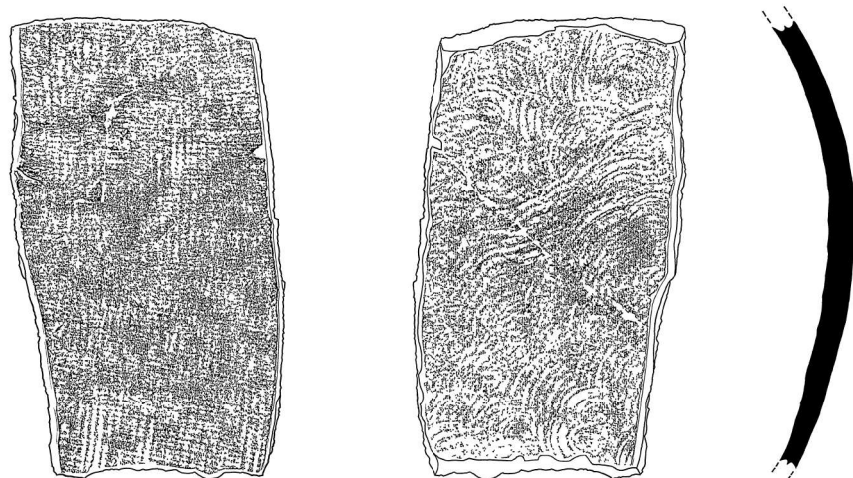
第23図 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器実測図2 (1/3)

第25図19は須恵器の甕で、口縁部付近が全周、失われている。頸部は細長く、肩部には凹線を巡らせ、体部の約1/2の高さに時計回りのヘラケズリを施す。体部最大径9.5cm、残存する器高15.0cm。

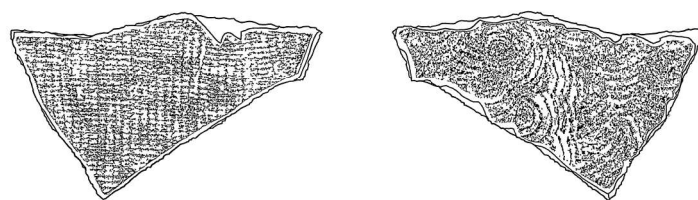
第26図22～25は須恵器甕の口縁部から肩部にかけての破片である。22と23は同一個体と考えられるが、接合しない。頸部は短く、口縁部に向かって外反しながら広がり、口縁端部は下へ伸ばし、丸くおさめる。肩部の破片は風化が激しく、外面の横方向に施されたカキ目がかろうじて観察できる。口縁部復元径16.8cm。24は約1/3が残存する。頸部は短く、外反しながら広がり、口縁端部は下へ伸ばす。頸部の外面には横方向のカキ目、肩部の外面は格子目のタタキ、内面には同心円のタタキが施される。また、外面には自然釉も観察できる。口縁部復元径22.0cm、残存する器高7.3cm。25は口縁部の約1/3が残存し、全体に焼けひずみがある。頸部は直線状に外へ開き、口縁端部は下へ伸ばし、丸くおさめる。頸部の外面には4段の沈線を巡らせ、その間



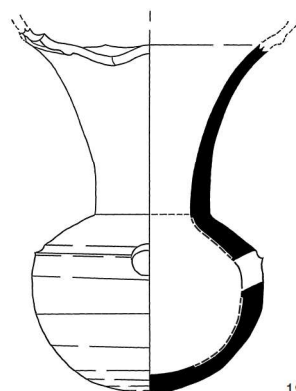
第24図 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器実測図3 (1/3)



17



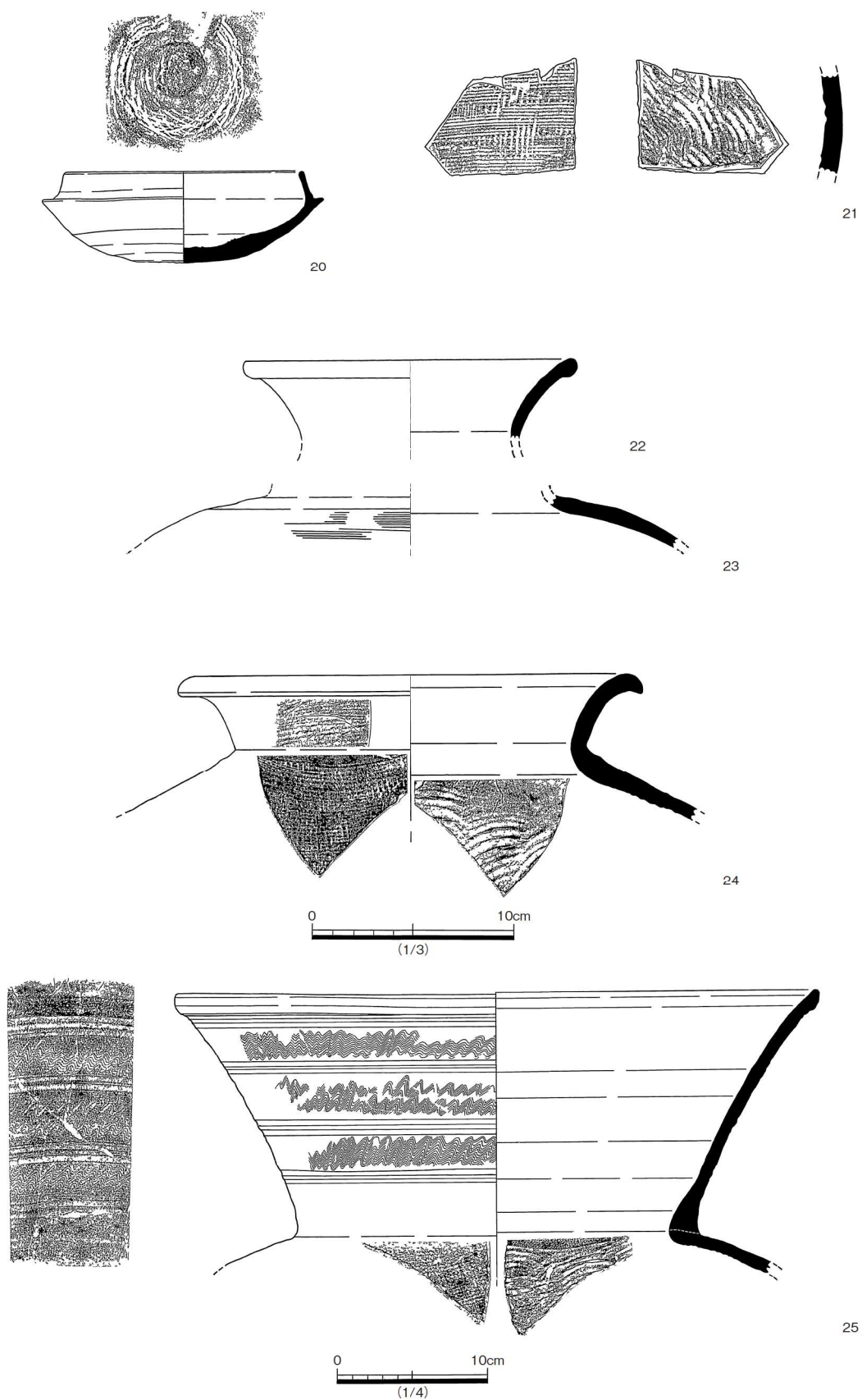
18



19

第25図 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器実測図4 (1/3)

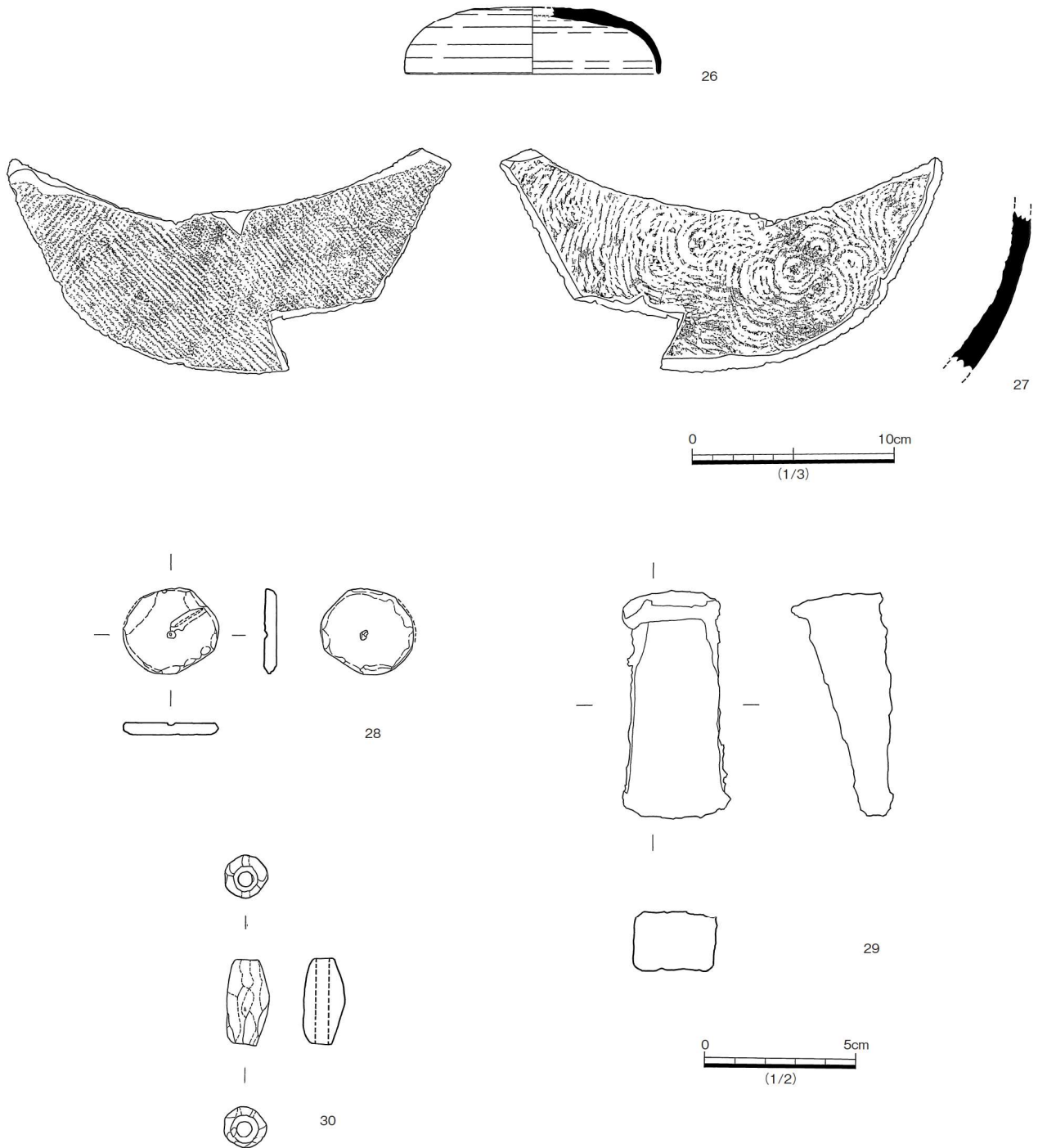
II. 調査の記録



第26図 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器実測図5 (1/3・1/4)

に3段の波状文を施している。肩部の外面には格子目のタタキ、内面には同心円のタタキが残る。口縁部復元径42.7cm、残存する器高18.7cm。

第27図28～30は表土剥ぎ中に出土した遺物である。28は滑石製の円盤で、両面に穿孔途中のくぼみがあるが、貫通はしていない。大きさは $28 \times 3.1 \times 0.4$ cm、重さは7.47g。29は鉄製の楔で、大きさは $7.6 \times 3.6 \times 3.4$ cm、重さは251.74g。30は土錘である。大きさは $2.8 \times 0.4 \times 0.4$ cm、重さは4.88g。



第27図 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器実測図6 (1/2・1/3)

3. 小結

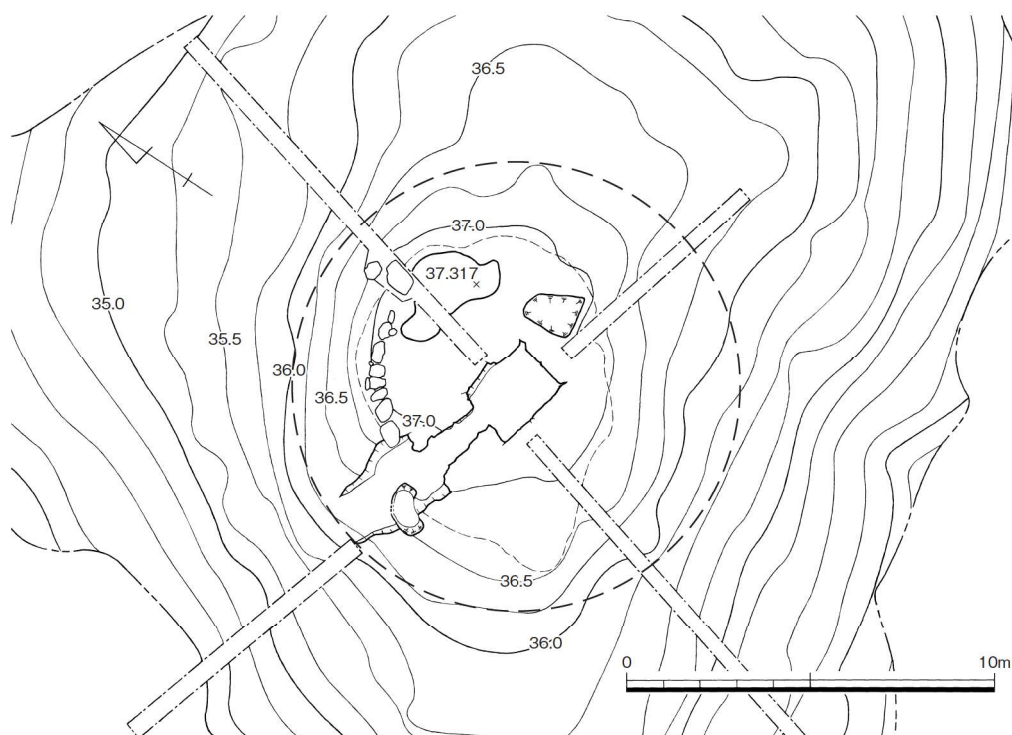
(1) 古墳の時期と規模

岐志花掛山古墳では横穴石室内と墳丘および周辺部から須恵器と土師器が出土している。このうち、上限時期にあたるのは石室内から出土した第16図1～5で、TK10新段階～TK43段階、下限は第16図6～15で、TK217古段階に相当すると考えられる。この間にあたるTK209段階の須恵器については、墳丘および周辺部から第22図2・3、第23図7、第24図10・11、13、第27図26が出土している。このことから、古墳は6世紀後半頃に築造され、7世紀初頭まで追葬が行われたものと考えられる。

墳丘の規模については、外護列石の並びを手掛かりとし、前庭部の端部を墳裾とすると、直径12～12.5m程度の円墳であったことが復元できる（第28図）。この場合、標高36.0～36.5m付近に裾が巡っていたことが推測される。

(2) 須恵器のヘラ記号

石室内で出土した須恵器のうち、蓋4点、坏2点にヘラ記号が施されており、蓋については天井部の外面、坏については底部外面にそれぞれ描かれている。いずれも木の葉に似た形状だが、線の引き方については相違がみられた。第16図6はまず中央の線を引き、続いて右の弧、左の弧の順で描かれている。7・11は中央の線を引き、左の弧、右の弧の順で描いたと考えられる。9は中央の線が最初であることはかろうじてわかるが、風化が激しく、左右の前後関係は判断できなかった。10は中央の線を引き、左の弧、右の弧の順で描いているが、このうち、右の弧は途中で手が滑ったのか、線を継いでいる。13は中央線を引いたのちに、弧を反時計回りに一筆で描いている。このような描き順の違いに加え、記号の大きさや形状にも若干の相違がみられるため、それぞれの記号を描いた人物が異なる可能性が考えられる。



第28図 岐志花掛山古墳 墳丘推定復元図 (1/200)

Ⅲ. 科学分析

1. 糸島市岐志花掛山古墳出土装身具の保存科学的調査

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

糸島市岐志花掛山古墳から出土した耳環とガラス玉を対象とした保存科学的調査を行った。耳環やガラス玉といった装身具類は、肉眼による観察や計測に加え、顕微鏡による細部の観察や、蛍光X線分析による材質調査といった保存科学的調査を行うことで、資料の系譜関係につながる情報が得られることが知られている。

対象とした資料は耳環とガラス玉、各1点である。作業は福岡市埋蔵文化財センターのデジタルマイクロスコープ（HIROX社製KH-8700）と、蛍光X線分析装置（AMETEK社製Orbis）を使用した。蛍光X線分析の仕様は次のとおりである。

対陰極：ロジウム（Rh）／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：20または50kV・電流値：1000 μ A／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mm ϕ ／測定時間120～180秒

耳環は環の外径が30.8mm、太さ6.6mmのいわゆる太環に属する。現状では全体が緑青に覆われ、耳環に一般的な金や銀の外観につながる様な加飾は、痕跡すら見られない。通常、開口部には加飾に関わる痕跡が現れるが、本資料については腐食層が見えるのみである。

蛍光X線分析は表面3箇所について行ったが、いずれも非常に強い銅のピークと、微弱な鉄、セレンといった元素のピークが認められる。鉄は土壌に豊富に含まれ、耳環本体のものか土壌からの影響か判断は難しい。セレンは過去にも古墳時代の青銅製品で検出された事例があるが（比佐ほか2018）、その検出理由は不明である。以上の結果からは、ほぼ純銅製という判断となる。表面処理が無ければ10円玉の様な色調を呈していたことになるが、使用当時の状態については不明である。

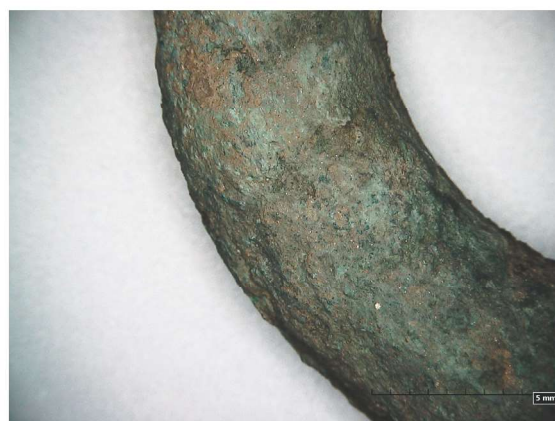
ガラス玉は青紺色で、径5.0mm、厚さ3.1mmを計り、小玉に区分される。デジタルマイクロスコープによる透過光拡大観察では、側面を見ると孔の長軸方向に平行して並ぶ気泡列や気泡筋が観察されることから、引き延ばして製作した管ガラスを細分し、再加熱により破断面を丸くする方法で製作されたことが分かる。小口面は研磨されたかのように平坦になっているが、この時期の青紺色小玉にはよく見られる特徴である。

蛍光X線による材質調査では、主成分である珪素の他、ピークの高い順にカルシウム、鉄、アルミニウム、カリウム、マンガンが明瞭に検出されている。それ以外に微弱なピークとしてマグネシウム、銅、鉛も見られる。また、鉄のピークと一部重複しているが、色調から見てコバルトも含まれると考えられる。ピークの特徴からはコバルトで着色された低アルミナタイプのソーダ石灰ガラスと考えられる。当該期の資料としては、一般的な材質、形状、製作技法の資料といえる。なお、今回、定量値を算出しておらず詳細な比較はできないが、マグネシウムの検出や製作技法などからは、融剤に植物灰を用いるササンガラスである可能性が高いと思われる（田村2016）。

田村朋美2016『東アジアにおける「西のガラス」の流通からみた古代の物流に関する考古科学的研究』（科学研究費助成事業研究成果報告書）

比佐陽一郎・松園菜穂2019「元岡G-1号墳出土資料に関する保存科学的調査」『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書 元岡・桑原遺跡群33-55次・56次調査の報告・元岡古墳群G群6号墳の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1381集 福岡市教育委員会

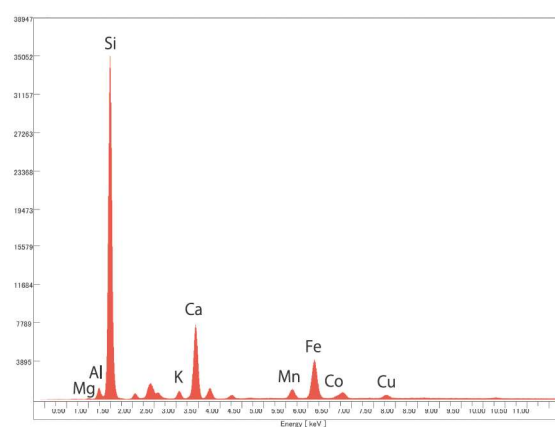
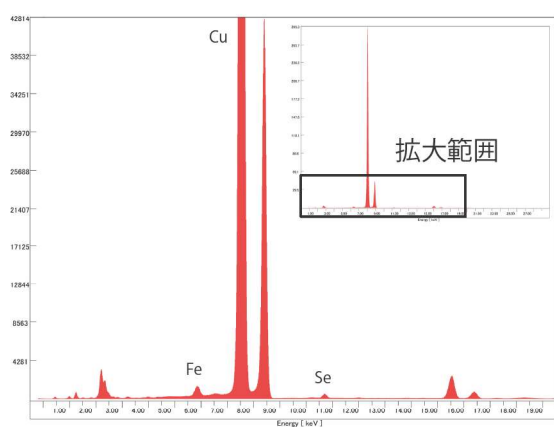
Ⅲ. 科学分析



耳環の拡大画像

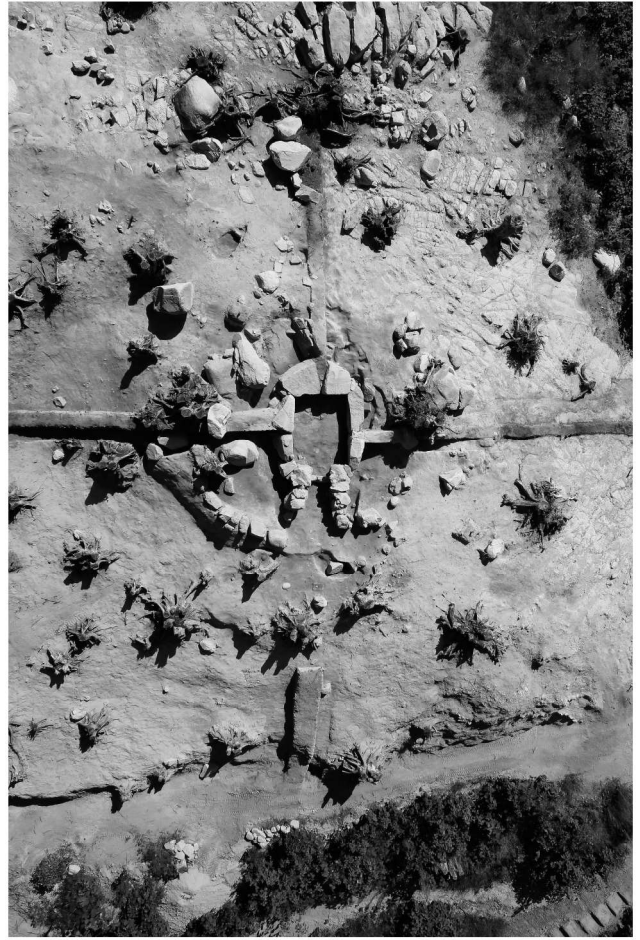


ガラス玉の拡大画像



蛍光X線分析の結果

図 版



図版 1 - 1 岐志花掛山古墳 空中写真 6
(左：石室掘削前（西から）、右：石室完掘および墳丘盛土除去後（西から）)



図版 1 - 2 岐志花掛山古墳 石室上面検出状況
(左：東から、右：南西から)

図版 2



図版2－1 岐志花掛山古墳 石室検出状況 1

(左上：羨道部閉塞状況（西から）、中上：羨道部（西から）、右上：羨道部閉塞状況（南東から）
左下：羨道部右側壁（北から）、中下：玄門部（東から）、右下：羨道部左側壁（南から）)



図版2－2 岐志花掛山古墳 石室検出状況 2

(左：羨道から玄室方向を見る（西から）、右：玄室奥壁から羨道部を見る（東から）)



図版2－3 岐志花掛山古墳 石室検出状況 3

(左：玄室左側壁（南から）、中：玄室奥壁（西から）、右：玄室右側壁（北から）)



図版 3-1 岐志花掛山古墳 石室床面遺物出土状況 1
(左：玄室床面 (北から、16-4・5・9 他)、右：羨道部床面 (東から、16-1・2))

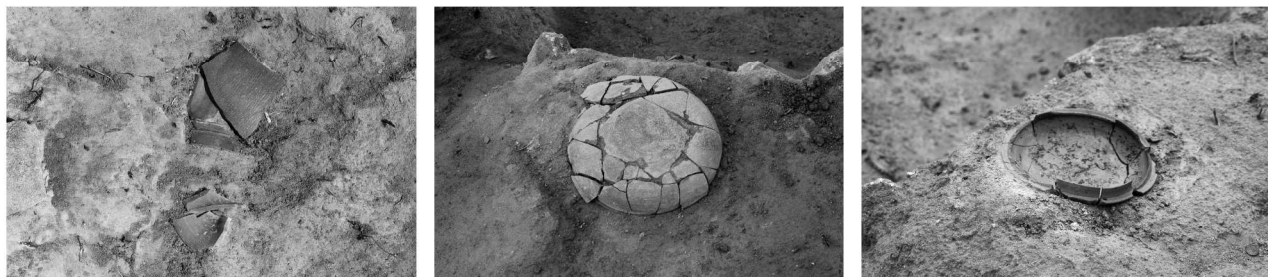


図版 3-2 岐志花掛山古墳 石室床面遺物出土状況 2
(左：玄室床面 (北から、13-2・3・5・6・9・11・12、14-13・14・16・17・20~22、15-23、16-3 他)、
右：玄室床面 (北から、16-6・11 他))

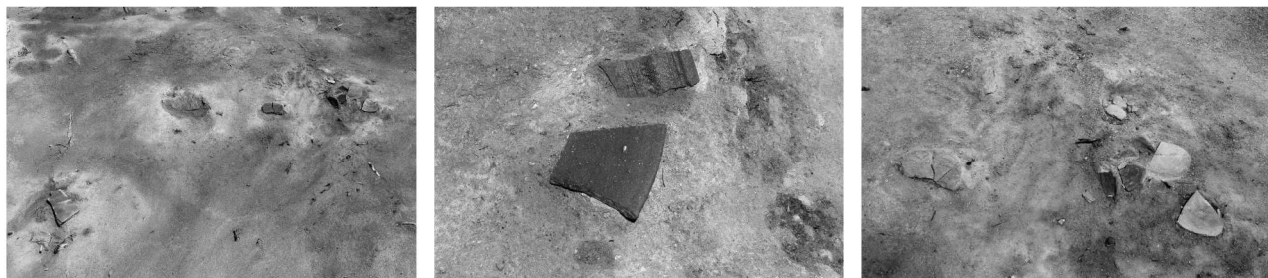


図版 3-3 岐志花掛山古墳 石室床面遺物出土状況 3
(左：玄室床面 (北から、13-2・5・6・9・11、14-13・14・16・17・20~22 他)、
右：玄室床面 (北から、16-14、18-20 他))

図版 4



図版 4-1 岐志花掛山古墳 墳丘遺物出土状況 1
(左：南西から、22-4 他、中：南西から、22-2、右：西から、22-3)



図版 4-2 岐志花掛山古墳 墳丘遺物出土状況 2
(左：南西から、23-6 他、中：南西から、26-25、右：西から、23-8・9 他)



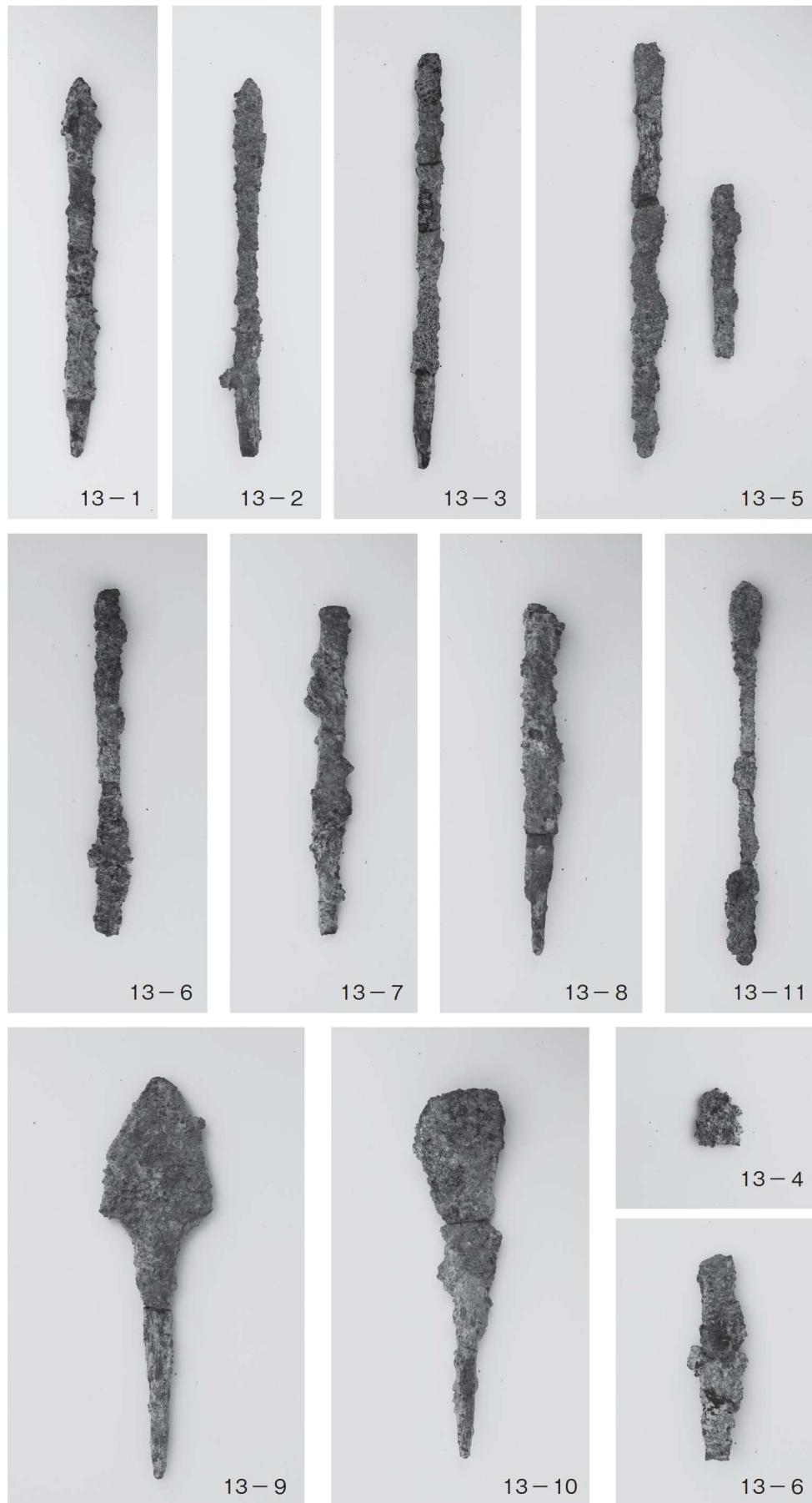
図版 4-3 岐志花掛山古墳 墳丘遺物出土状況 3
(左：北西から、25-17、中：西から、25-18・19、右：西から、26-24 他)



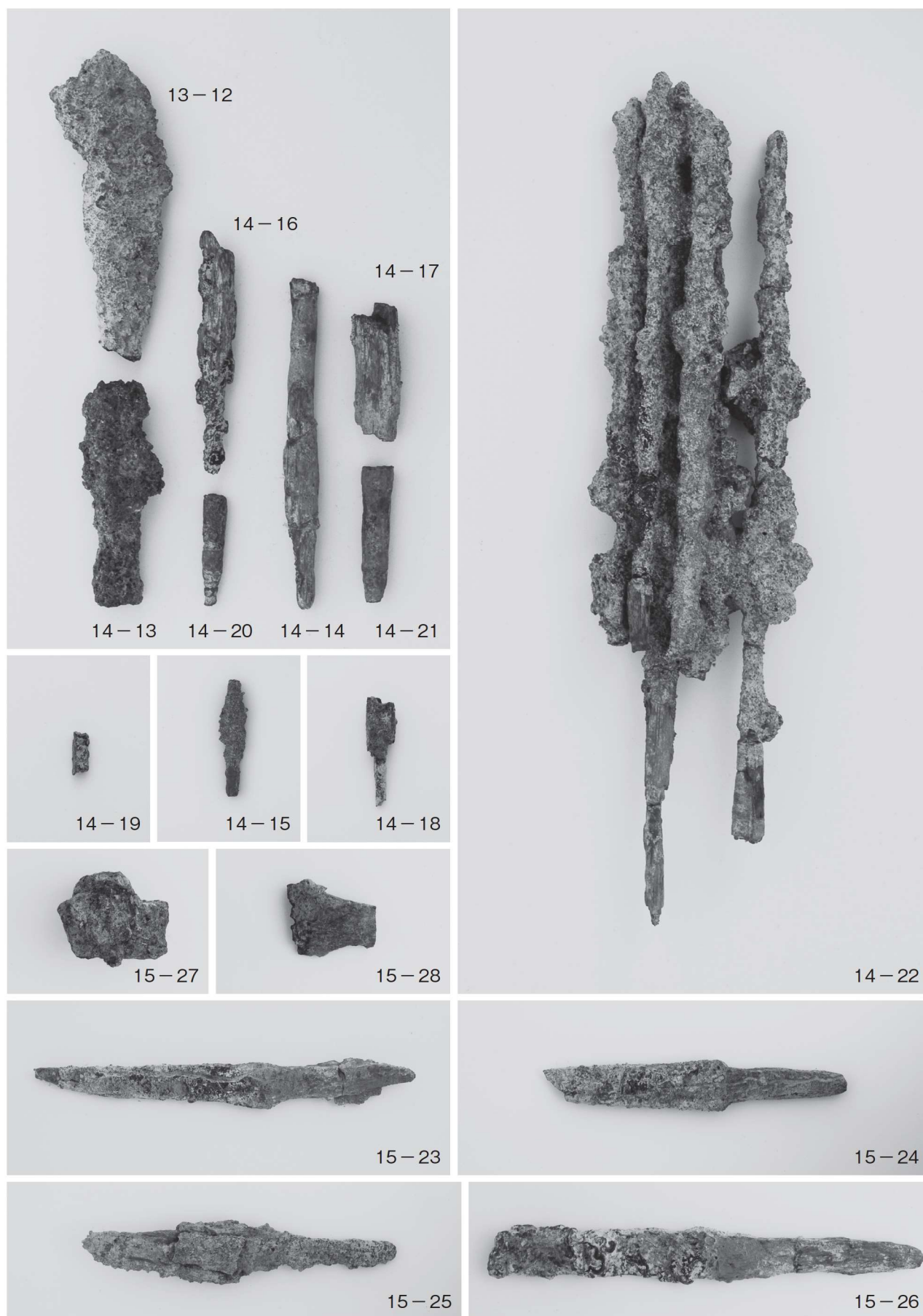
図版 4-4 岐志花掛山古墳 墳丘遺物出土状況および外護列石、土層断面検出状況
(左：北から、24-11、中：外護列石（西から）、右：A土層断面（西から）)



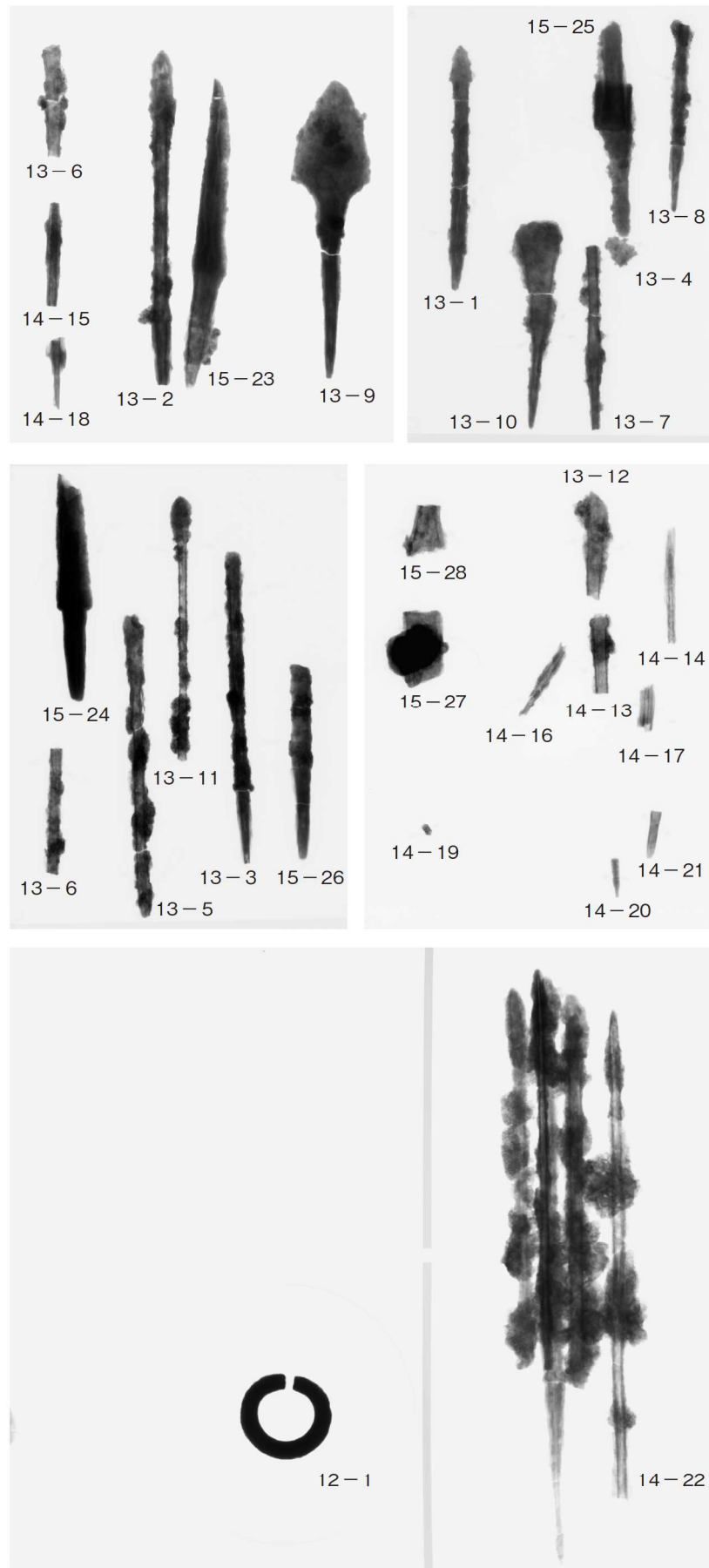
図版 4-5 岐志花掛山古墳 土層断面検出状況
(左：B土層断面（南から）、中：C土層断面（西から）、右：D土層断面（南から）)



图版 5-1 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器 1



図版 6-1 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器 2



図版 7-1 岐志花掛山古墳 石室出土鉄器X線写真



图版 8-1 岐志花掛山古墳 石室出土土器 1



图版 9-1 岐志花掛山古墳 石室出土土器 2

图版 10



图版 10-1 岐志花掛山古墳 石室出土土器 3

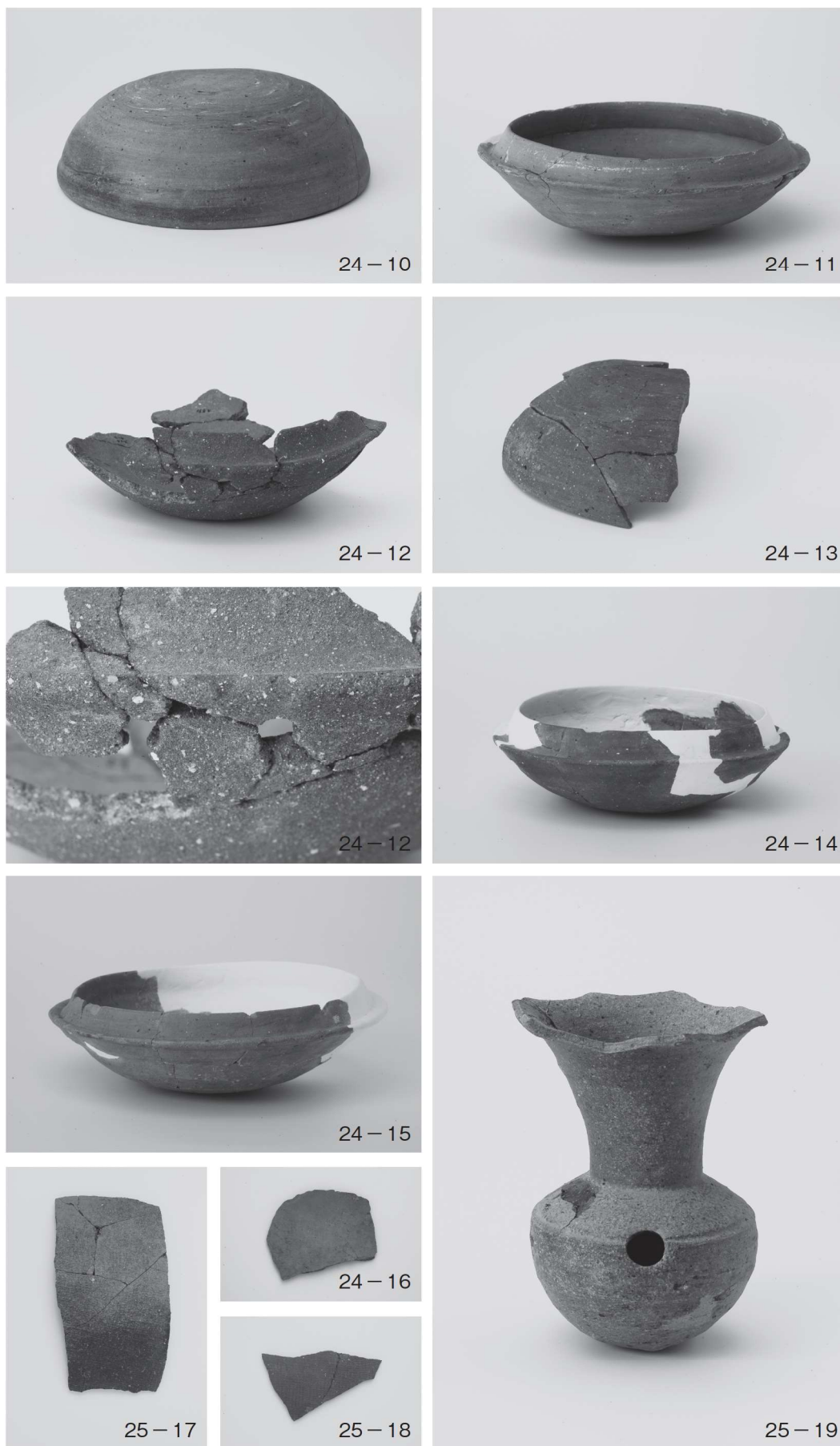




图版 11-1 岐志花掛山古墳 石室出土土器 4



図版 12-1 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器 1



図版 13-1 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器 2

図版 14



図版 14-1 岐志花掛山古墳 墳丘出土土器 3 および出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きはなかけやまこふん							
書 名	岐志花掛山古墳							
副 書 名	県道福岡志摩前原線道路改良事業に係る発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	糸島市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
著 者 名	江野道和、比佐陽一郎							
編 集 機 関	糸島市教育委員会							
所 在 地	〒819－1192 福岡県糸島市前原西一丁目1番1号							
発 行 年 月 日	西暦2020年3月19日							
保 管 場 所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕			糸島市教育委員会				
保管場所所在地	〒819－1192 福岡県糸島市前原西一丁目1番1号							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査総面 積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岐志花掛山古墳	福岡県糸島市 志摩岐志	40230		33° 34′ 34″	130° 07′ 29″	2018.5 ～ 2018.10	1700㎡	道路
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
岐志花掛山古墳	古墳	古墳時代	円墳		須恵器、土師器、鉄器、石器、 装身具類			

岐志花掛山古墳

—県道福岡志摩前原線道路改良事業に係る発掘調査報告書—

糸島市文化財調査報告書 第23集

令和2（2020）年3月19日

発行 糸 島 市 教 育 委 員 会

〒819-1192 福岡県糸島市前原西一丁目1番1号

印刷 株式会社 西日本新聞印刷

〒812-0041 福岡県福岡市博多区吉塚8-2-5

